

平成25年～29年度 文部科学省

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

ウェルネス×協奏型地域社会の  
担い手育成「学び舎」事業

01

平成25年度  
成果報告書

平成26年3月





平成25年～29年度 文部科学省

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

ウェルネス×協奏型地域社会の  
担い手育成「学び舎」事業

01

平成25年度  
成果報告書

平成26年3月



札幌市立大学

SAPPORO CITY UNIVERSITY



# 『ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業』

## 平成 25 年度報告書

### 目次

ごあいさつ	P3
事業推進責任者 札幌市立大学 学長 蓮見 孝	
<b>I . 申請書・選定結果</b>	
申請書	P6
選定結果	P32
所見	P33
<b>II . 事業概要</b>	
ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業の概要	P36
COC 事業担当者 デザイン学部 教授 中原 宏	
学内組織体制図	P38
<b>III . 活動報告</b>	
0. 活動履歴	P40
1. 教育改革企画推進チーム	
1.1 「異分野連携科目の深化」班	P44
1.2 「新設科目展開・地域科目の増強」班	P47
2. 研究企画推進チーム	P48
2.1 「研究基盤の整備・研究関連調査」班	P48
2.2 「ウェルネスサイエンス研究の推進」班	P49
3. 学び舎企画推進チーム	P51
「真駒内夜学校」班	
「たまり場・しゃべり場」班	
「シニアアカデミー」班	
4. 広報企画推進チーム	
4.1 「広報企画・制作・運営」班	P54
4.2 「COC 事業催事企画・運営」班	P58
5. COC 特任教員	P60



## ごあいさつ

事業推進責任者  
札幌市立大学 学長  
蓮見 孝

札幌市立大学は、平成 25 年度に公募された文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に札幌市と連携して申請し、地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める優れた取り組みとして評価され採択されました。

事業のタイトルは、「ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業」。平成 25～29 年度の 5 年間にわたり、札幌市全域を視野に入れながら、改修され多目的に活用される南区の旧真駒内緑小学校を活動拠点として、さまざまな活動をおこなっていきます。

教育機関である大学が地域の核としておこなうCOC事業の目的は、地域を支える多世代・多分野の人びとの「学び合い」の場づくりと、その効果の活用です。多様な人びとが参画し、暮らしやすさ(ウェルネス)を高め、まちの持続的発展の担い手を、力を合わせて育て合うプログラムの推進をめざしていきます。

地域は今、半世紀以上に及ぶ高度経済成長期を経て、急激な少子・高齢化の進行、人口減少による過疎化、グローバル化等による地域産業の衰退、そして地球規模の環境問題や頻発する大災害など、さまざまな課題に直面しています。

そして全国で5番目の人口規模である政令指定都市・札幌も、やがて人口減少に転じ、北国固有の生

活環境条件とも相まって、深刻な課題に直面することが予想されます。

本来、地域社会は、都市計画というような自治体の施策によって整備されてきたインフラ等とは異なり、住民同士の支え合いによって成り立つコミュニティ力を基盤に、長い時間を重ねて形成されてきたものでした。地域の主役は、まさにそこに住まう人たちであり、その生活の知恵と力能(パワー)が、安全で安心なまち、住み続けたいと思わせるまちの味わいを醸し出してきたのです。

大学と市は、そのような本来の地域のあるべき姿に立ち返り、市民を主役と位置づけるまちづくりのあり方を模索するとともに、大学が核となってその活動の拠点づくりを進めていきたいと思っています。

地域社会はまた、次の時代を支える担い手である子どもたち、青年たちを、さまざまな文化活動を通して丁寧に育て上げてきました。COC事業には、多くの大学生たちも関わります。より主体的に学び、社会性の高い人材を育て上げるために、ぜひ市民のみなさんのお力をお借りしたいと願っています。

COC事業として推進する「COCカリキュラム」、「COCリサーチ」、「COCタウンアカデミー」という3つの企画に、多くの市民のみなさまにご参画いただき、ご支援をいただければ幸いです。



# I . 申請書・選定結果

## 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」計画調書

### I. 大学等の目的・目標を踏まえた「地域志向」【2ページ以内】

#### 1. 大学等の目的・目標

学則等に定める大学全体の目的・目標を記入してください。

#### ■ 学則に定める大学全体の目的

札幌市立大学の学則第1条は、「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究することにより、学術研究の高度化などに対応した職業人の育成を行うとともに、知と創造の拠点として札幌市におけるまちづくり全体により大きな価値を生み出し、地域社会に対する積極的な貢献を果たすことを目的とする。」である。これを踏まえ、以下の教育理念と教育目的を掲げている。

#### ■ 札幌市立大学の教育理念

札幌市立大学の教育理念は、「人間重視を根幹とした人材の育成(以下、人間重視)」ならびに、市民に開かれた大学、市民の力になる大学、市民が誇れる大学の3つの視点を挙げた「地域社会への積極的な貢献(以下、社会貢献)」である。

#### ■ 札幌市立大学の教育目的

札幌市立大学の教育目的は、1)学術研究の高度化に対応した職業人の育成、2)まちづくり全体により大きな価値を生み出す「知と創造の拠点」の形成である。以下に、デザイン学部と看護学部の教育目的と育成する人材像について述べる。

#### ● デザイン学部の教育目的と育成する人材像

- ・幅広いデザイン能力を持った人材
- ・人間中心の視点に立ったデザインに取り組める人材
- ・地域社会に貢献できる人材

この教育目的を達成するために、次の能力を備えた人材を育成する。①コミュニケーション能力、②課題探求能力と問題解決能力、③デザインの基礎となる表現力、④人間や環境に配慮したデザイン思考能力、⑤新たな価値を発見する柔軟な発想力、⑥企画力や管理・運営能力。

#### ● 看護学部の教育目的と育成する人材像

- ・的確な実践力を有する人材
- ・人間性を尊重した対人関係形成能力を備えた人材
- ・地域社会に貢献できる人材

この教育目的を達成するために、次の能力を備えた人材を育成する。①対人関係形成能力、②権利擁護・安全なケア提供能力、③的確な判断能力と問題解決能力に基づく看護実践技術力、⑤医療従事者間における調整・指導のための基礎的能力、⑥課題解決力を高めるための自己研鑽能力。

#### ■ 札幌市立大学の教育の特徴

札幌市立大学の教育の特徴は、デザイン学部と看護学部が協働して「異分野連携教育」を実施している点にある。1年次の「スタートアップ演習」(共通教育科目)では、両学部の学生が交流・協力の重要性について主体的に学び、他者とのコミュニケーション能力を高めるグループ学習を実施している。3年次の「学部連携演習」(専門教育科目)では、相互の専門性を尊重しながら、デザイン・看護ならではの視点と考察で問題意識を深め、それぞれの専門分野で連携し、協働で社会的課題に取り組む能力を養成している。また、大学院においても「連携プロジェクト演習」、「横断型連携特別演習」を実施している。

## 2. 大学等の目的・目標を踏まえた「地域志向」

大学全体の目的・目標における「地域志向」の位置付け、当該大学にとっての「地域志向」の内容を具体的に記入してください。

### ■ 大学全体の教育目標における「地域志向」の位置づけ

札幌市立大学の「地域志向」に関連する具体的な目標は、以下の通りである。

#### 1) 学術研究の高度化に対応した、地域に貢献できる職業人の育成

デザイン学部と看護学部に通ずる「人間重視」の考え方を基本とし、デザイン学部では幅広いデザイン能力を持ち、地域に貢献できる職業人を、看護学部では医療の高度化に対応する知識・技術に加え、問題解決能力を有し、他職種と連携し、地域に貢献できる職業人を育成する。

#### 2) まちづくり全体により大きな価値を生み出す「知と創造の拠点」の形成

地域の産業や芸術・文化の振興、都市機能・都市景観の向上などへ貢献するとともに、地域住民の健康ニーズへの寄与を果たす。特に、札幌市の行政施策との緊密な連携によって、地域課題の解決に取り組む。

### ■ 地域志向の教育・研究・社会貢献

#### 1) 地域志向の教育

多様な地域ニーズに適応できる職業人の育成を目的として、デザインと看護の学部連携教育を実施している。1 年次「スタートアップ演習」では、デザイン学部と看護学部の学生が、地域の多様な価値観に触れ、地域課題を体感・発見する。3 年次の「学部連携演習」では、デザインと看護の専門性を活用・連携し、地域課題を解決することを目指している。また、両学部の教員同士の連携も必要なことから、「地域志向」の研究課題の発見を促す役割をも担っている。さらに、平成 22 年に開学した大学院(博士前期・後期課程)においては、デザイン研究科と看護学研究科の横断型連携科目によって、地域に密接に関わるプロジェクトが推進されていて、学部教育からの地域連携の接続を良好なものとしている。

特筆すべき長所として、平成 23 年度に財団法人大学基準協会の認証評価で、デザイン学部と看護学部による異分野連携教育に対して高い評価を受けた。また、全学的な教育改善に関しては、平成 24 年度に文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に申請・採択され、北海道・東北 17 校による「産官学連携による地域・社会の未来を拓く人材の育成」事業を展開している(p.26 を参照)。

#### 2) 地域志向の研究・社会貢献

札幌市立大学では、平成 19 年に「地域連携研究センター」を設置し、札幌市や関連団体からの受託研究等を受け入れるとともに、札幌都心部に「サテライトキャンパス」を開設し、市民公開講座・セミナーなどの社会貢献を実施してきた(p.6, p.11-12 参照)。これらは、地域の産業や芸術・文化の振興、都市機能・都市景観の向上などへの貢献とともに、地域住民の健康ニーズへの寄与に関わる「地域志向」のテーマである。なお、平成 24 年度に本学が策定した「第二期経営戦略」では、「地域創成の核となる大学づくり」を戦略 4 本柱の筆頭に据え、地域社会に貢献できる大学としてのプレゼンスの確立をめざしている。

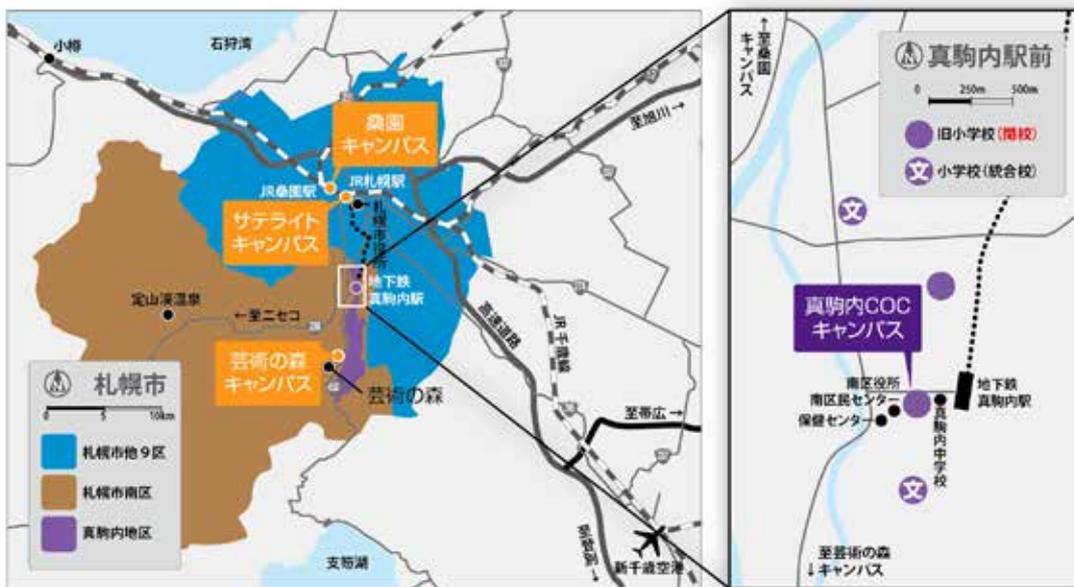
### ■ ウェルネス×協奏型地域社会の実現に向けて

以上の「地域志向」の教育・研究・社会貢献の活動を受けて、本事業では、**ウェルネス×協奏型地域社会**の実現に向けて全学的にさらに推進することとした。**ウェルネス(Wellness<sup>\*</sup>)**とは、**個人や集団の最適な健康状態を指し、身体的、心理的、社会的、精神的及び経済的に有する個人の潜在的な能力を可能な限り実現させ、家庭、社会、職場及びその他の環境下における個人に期待される役割を担うことができることを意味する**。また、**協奏型地域社会**とは、都市部で見られる少子高齢化・孤立化の問題に対し、**多世代・多セクターを繋ぐ担い手の育成によって、地域課題を(共に奏で)解決できる地域社会**を意味する。

\*原典:BJ Smith, KC Tang & D Nutbeam(2006): WHO Health Promotion Glossary: new terms

## II. 「地域」の設定【2ページ以内】

1. 「地域」の図 対象地域を、包括地域として「札幌市全域」、集中地域として「札幌市南区」とする。



### 2. 「地域」の課題等

①「地域」に含まれる各自治体の人口と財政力の現状

都道府県・市区町村	H22国勢調査人口	財政力指数(21~23平均)
札幌市	1,913,545人	0.691

※都道府県・市区町村の数が多い場合は、適宜欄を追加して下さい。

②「地域」の課題

今回の申請により解決を図ろうとする課題を中心に、当該地域の課題を記入してください。(ここで示された地域の課題に対する大学の対応については、「Ⅲ. 地域を志向した教育・研究・社会貢献の現状と達成目標」及び「Ⅳ. 地域を志向した教育・研究・社会貢献の具体的な取組」で記載すること。)

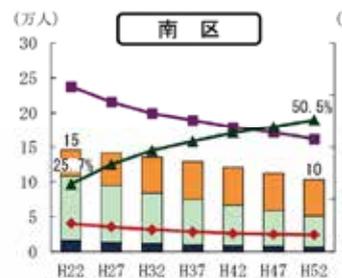
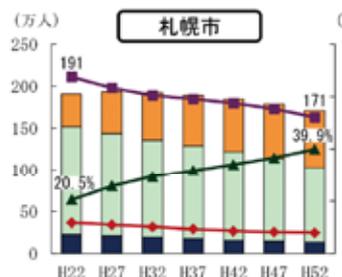
#### ■ 札幌市の人口構成と南区における課題

平成22年の国勢調査による札幌市の人口は、1,913,545人である。それに対して南区の人口は146,341人であり、札幌市全体の7.6%を占めている。札幌市の老年人口割合は20.5%、特に南区は25.7%で、札幌市10区の中で少子高齢化が顕著で、今後さらに進行することが予想される。以下に、集中地域の「札幌市南区」の課題を述べる。

**課題① 多世代・多セクター型コミュニティの再構築** 少子高齢化に加え、地域活動の減少と子どもから高齢者にいたる社会的孤立の顕在化への対応として、多世代・多セクターで構成されるコミュニティの再構築を目指す必要がある。

**課題② 南区の魅力ある顔づくり** 地下鉄真駒内駅前は、大幅な児童数減少により、最近、小学校2校が統廃合された。今後もさらなる少子高齢化が加速し、街の賑わいが失われつつある。また、定山溪温泉や芸術の森などの札幌の観光名所をもつ南区の玄関口という位置にあるにも関わらず通過点となっているに過ぎない。魅力ある街としての顔を、どのように再編していくか知恵の結集が求められている。

**課題③ 高齢者のウェルネス支援** 高齢者が生きがいをもち、地域社会での活躍や次世代の育成に寄与できるように、介護予防、在宅移行支援などの健康維持増進とウェルネス支援が必要である。



平成47年に老年人口が生産年齢人口を超える  
平成52年には高齢化率が5割を超える  
H22~52の札幌市と南区の人口構成予測

### 3. 当該「地域」を対象とする理由

大学等が当該地域の拠点となる必要性・重要性を、これまでの自治体、地元企業、NPO 等各種団体・機関との連携の実績も含めて記入してください。

#### ■ 包括地域「札幌市全域」を対象とする理由

札幌市立大学は、平成 18 年の開学からこれまで「札幌市全域」を対象に札幌市や関係団体と連携し、教育・研究・社会貢献を展開してきた。今後も継続性が札幌市より求められており、札幌市全域を対象にして取り組む必要性・重要性は十分にあると言える。なお、これまでの主な実績は以下の通りである。

#### 1) デザイン学部主体の社会貢献 ( )内は連携先

- ・札幌市円山動物園の動物舎・案内サインのデザイン監修(札幌市環境局)
- ・札幌市電 低床車両の市民の合意形成支援(札幌市交通局)
- ・札幌駅前通地下歩行空間のデザイン監修(札幌市市民まちづくり局ほか)
- ・札幌中心部の商店街活性化に関する支援(札幌市市民まちづくり局、札幌市経済局、NPO法人ほか)

#### 2) 看護学部主体の社会貢献 ( )内は連携先

- ・看護職復職支援講習会の実施(札幌市保健福祉局)
- ・認定看護管理者制度<サードレベル教育課程>の設置(日本看護協会)
- ・看護研究教育支援<札幌市内にある医療施設への教員の派遣>(市立札幌病院ほか)
- ・札幌市民のウェルネス支援<桑園ボランティア、中央図書館「元気カフェ」のワークショップ、札幌ぐるりウォーキングマップの作成ほか>(桑園地区連合町内会、札幌市保健福祉局ほか)



#### ■ 集中地域「札幌市南区」を対象とする理由

札幌市や地域住民による「まちづくり再編計画」を支援することが、札幌市立大学に期待されている。

#### 1) 札幌市立大学(芸術の森キャンパス)が立地する地域

札幌市立大学は、本部およびデザイン学部を札幌市南区に設置している。また、南区の玄関となる地下鉄真駒内駅は、中央区にある看護学部とを結ぶ交通拠点で、芸術の森キャンパスで行なわれる共通教育科目や学部連携科目の開講時は、デザイン・看護の学生の多くが利用している。

#### 2) デザイン・看護の連携による“地域住民のウェルネス×魅力ある顔づくり”の支援が必要な地域

札幌市南区は「人口社会増加数」が札幌市 10 区の中で最少、単独世帯が 31%であり、さらに居住地が広域に分散しているため、特に住民の QOL(Quality of Life)向上を目的としたまちづくりが求められる地域である。また、札幌市の施策として「子どもの体験活動の場」を真駒内駅前地区に設置する予定であるなど、札幌市立大学と札幌市が連携・協働して地域住民のウェルネスに貢献するのに最適な地域といえる。

札幌市南区は、定山溪温泉、滝野すずらん丘陵公園などの札幌の観光資源を有し、真駒内駅は玄関口である。本学は「シーニックバイウェイ」構想(p.21 を参照)に参加し、南区や地域住民との交流を通じて地域を活性化する事業に協力支援してきた実績があり、今後もそれらを発展していく必要がある。札幌市立大学は南区芸術の森地区に立地し、平成 23 年には、「札幌芸術の森」を運営する財団法人と包括的連携協定を結び、札幌市の連携と共に本事業を推進する準備が整いつつある。

### Ⅲ. 地域を志向した教育・研究・社会貢献の現状と達成目標 【「Ⅳ. 地域を志向した具体的な取組」とあわせて10ページ以内】

大学全体・教育・研究・社会貢献のそれぞれにおいて、どのような地域志向を目指すのか、Ⅱ 2②で示した「地域の課題」を踏まえて、大学全体・教育・研究・社会貢献の項目毎に、可能な限り定量的・定性的な目標も設定しつつ、文章で記入してください。

- ・必ず記載する事項以外についても、積極的に定量的な目標を設定すること
- ・定性的な目標については、達成条件や達成時期が判断できる程度の具体的なものとすること
- ・平成25年度(現状又は年度末の見込み)と平成29年度末の補助期間終了時を対比させて目標を設定すること

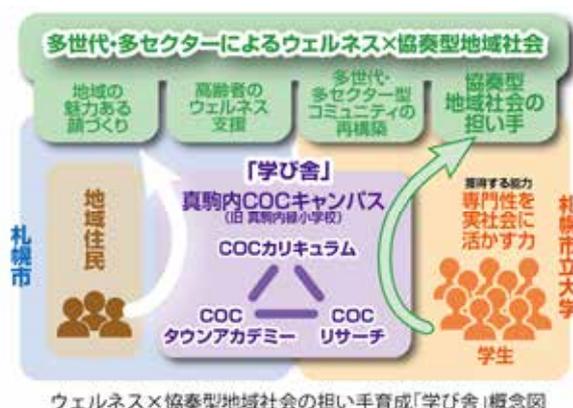
#### 1. 全体

Ⅱ 2②で示した地域の課題をどのように解決し、地域をどのように再生・活性化していこうとしているのか、また、今回の事業により自らの大学をどのように改革していくのかについて記入すること。

#### ■ 「学び舎」は地域

本事業の目的は、「地(知)の拠点」を創出するために、地域を「学び舎」として、地域主体の新たな大学キャンパスを構築し、そのキャンパスにおいて「地域志向のカリキュラム」を展開し、デザインと看護の専門性を活かして、協奏型地域社会のウェルネス支援、地域の活性に貢献する人材を育成することである(右図を参照)。

地域を「学び舎」とする目的は、地域とのつながりの中で「専門性を実社会に活かす力」を養成するためである。学生が地域に入り、地域住民との生きた絆の中から地域が抱えている課題を抽出し、数年後にはその課題の解決に結実することを目指す。以上は、本学が理念としている「人間重視」や「地域貢献」につながる。なお、最終年度に札幌市中央区にて、3年半の南区で得られた成果を参考に展開する。以上の事業全体の推進は「COC 推進会議」が担う(p.17を参照)。



#### ■ 地(知)の拠点:真駒内COCキャンパス

本事業では、集中対象地域「札幌市南区」の課題①～③を解決するために、札幌市と連携してCOCキャンパスを新設する。COCキャンパスは、協奏型地域社会の担い手(本学学生・教員、地域住民・自治体職員など)が参加し、それぞれの才能や能力を活かし合う交流拠点を目指す。事業期間においては、平成24年に閉校した旧真駒内緑小学校の空き教室の一部の提供を札幌市から受けて、「真駒内COCキャンパス」として、デザインと看護の学部連携による教育、地域志向の研究、地域住民と協働して社会貢献などを行なう「地(知)の拠点」とする。

真駒内COCキャンパスでは、以下の1)COCカリキュラム(教育)、2)COCリサーチ(研究)、3)COCタウンアカデミー(社会貢献)を展開し、地域課題の解決に臨む。

##### 1)COCカリキュラム(教育)

学生が地域に出て、地域住民に出会い、具体的な地域課題に取り組むことでこそ学び得る知見を活かし、実践力を高める「COCカリキュラム」を新設し、全学のカリキュラムを改編する。具体的に、1年次「スタートア



真駒内COCキャンパス設置予定地  
(旧真駒内緑小学校)

ップ演習」と3年次「学部連携演習」を「地域志向」にする。2年次には「学部連携基礎論」を新設し、異分野連携の方法論を学ぶ。また、学部4年間を通じて地域課題に取り組む自由科目の開講を検討する。さらに、デザイン学部と看護学部の専門教育科目の見直しを図り、「地域志向」の割合を強め、その内容をシラバスに明記する<専門教育科目のみ:デザイン学部 H25:5.2%(=5/97)→H29:12.2%(=12/98)、看護学部 H25:19.8%(=20/101)→H29:28.3%(=28/99)>。以上は、「教育部門」が主体となって(p.17を参照)、平成25～27年度に準備・試行し、平成28年度に新カリキュラムを展開する。

## 2)COC リサーチ(研究)

ウェルネス×協奏型地域社会の構築を目指す研究テーマ「COC リサーチ」を推進する。例えば、ウェルネス・プログラムの実践に関する教育効果、参加者意識の変容などの研究、地域資源を活かした賑わいの再生などに関する研究を推進し、COC リサーチ専用の学内競争的資金の運用を積極的に図る。また、地域住民のウェルネス支援研究の推進を踏まえ、ウェルネスに関連する企業等の参画を担保する仕組みとして、真駒内COCキャンパスに加え、札幌都心部にある「サテライトキャンパス」を活かす。以上は、「研究部門」が主体となって運営する(p.17を参照)。

## 3)COC タウンアカデミー(社会貢献)

札幌市や南区を対象に全学的な社会貢献「COC タウンアカデミー」を展開する。特に、地域をテーマにした、質の高い「生涯学習プログラム」等を推進するために、大学の教育資源を地域に還元するとともに、地域の人材発掘を行ない地域の発展に寄与する。市民公開講座・セミナーは「サテライトキャンパス」においても従来通り継続して行なう。以上は「社会貢献部門」が主に運営する(p.17を参照)。

## ■ 本事業の達成目標

II 2 ②で示した3つの地域課題を解決するための教育・研究・社会貢献ごとの達成目標を下図に示す。現在(H25)の状況を確認した後、中間評価のある3年目(H27)に進捗状況を検証・報告し、それに改善を加え、事業終了時(H29)には、事業開始時(H25)、中間評価時(H27)を超える実績を目指す。これらは「事業評価部門」が担い(p.17を参照)、以下の教育、研究、社会貢献の達成目標に対する評価を実施する。

### 1)COC カリキュラム(教育)

学部連携教育を基盤とする新カリキュラム改編の進捗、新たな教育評価方法の検討と導入の進捗、「地域志向」の卒業研究の件数などを各年度で算出、評価する。

### 2)COC リサーチ(研究)

ウェルネス×協奏型地域社会の構築に向けた研究件数、それに関わる教員数、得られた成果を国内外の学会等での発表した件数を、各年度で算出し評価する。

### 3)COC タウンアカデミー(社会貢献)

真駒内COCキャンパスにて実施した事業件数、その利用者数、高齢者の外出頻度やQOL向上などを定量的に測定し評価する。



本事業における教育・研究・社会貢献の達成目標

## 2. 教育

以下については必ず記入すること

地域志向／地域の課題解決の視点から、どのような人材を育成するのか  
どのようなカリキュラム、授業科目・方法を取り入れて計画を実現しようとしているのか

### ■ COC カリキュラムによって育成する人材像

学生が対象地域に出て、地域住民に出会い、具体的な地域課題に取り組むことで、はじめて学び得る知見を活かし、実践力を高める「COC カリキュラム」に新たに編成する。つまり、学生が主として授業を通じて地域に入り込むことで地域住民との生きた絆を作り、その中から地域住民が抱えている課題を発見し、卒業時には課題解決に向け実践し、「専門性を実社会に活かす力」の獲得を目指す。以上は、本学が理念としている「人間重視」や「地域貢献」の実現をこれまでよりも強固にするものである。具体的に、学部 1 年次から 4 年次、さらに研究科に至るまでに育成する力は、以下の①～⑤である。

- ①課題発見力(1年次): 地域課題を体験、発見できる。
- ②協調性+企画力(2年次): 課題解決のために、異分野間で協調し、解決方法を提案・企画できる。
- ③交渉力+コミュニケーション力(3年次): 専門性を実社会で活かすための交渉ができる。
- ④実践力(4年次): 課題解決に向けた実践ができる。
- ⑤プロジェクト推進力(研究科): 学部卒業後の大学院の研究科において、さらに地域志向のプロジェクトをディレクションし、地域住民とともに展開できる。

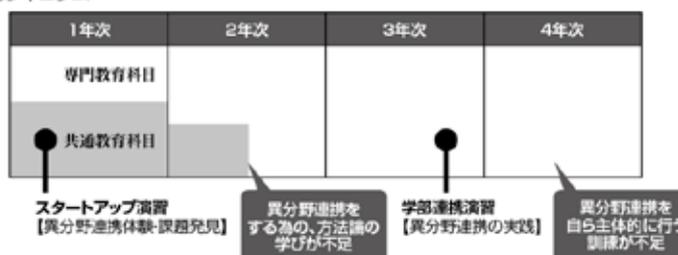
### ■ COC カリキュラムの内容

まず、現行の異分野連携科目の「スタートアップ演習(1年次)」と「学部連携演習(3年次)」を真駒内 COC キャンパスをフィールドとして実施する。次に、平成 28 年度の新カリキュラム導入に合わせ、異分野連携における基礎的な方法論の学びを充実させるために、2年次に「学部連携基礎論」を新設し、「スタートアップ演習」と「学部連携演習」を接続させる。さらに、1～4 年次までの異分野連携の自主的な実践力を養成する自由科目として「地域セミナー」を新設し、4 年次の卒業研究に繋ぐことを目指す。以上を COC カリキュラム(図の緑色)と位置付け、COC タウンアカデミーや COC リサーチと連動させ、地域課題の解決を図る。

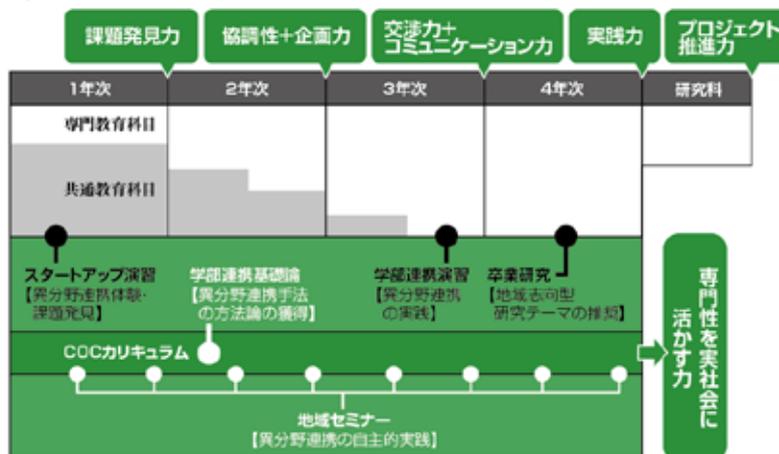
併せて、現行のデザイン学部・看護学部の専門教育科目のうち、「地域に密接に関わる内容」を、平成 26 年度のシラバスに反映させ、事業終了時(平成 29 年度)には全科目に対する「地域志向」科目の割合を増やす。

さらに、大学院(研究科)における高度職業人の教育についても、両研究科の連携による COC カリキュラムを展開し、社会のコアとなり得る人材を育成する。

#### ■ 旧カリキュラム



#### ■ 新カリキュラム



■ カリキュラムの状況		
	平成25年度	平成29年度
<p><b>デザイン学部のカリキュラムの状況</b></p> <p>■: 地域に関する授業 文中の数値(%)は全科目数に対する「地域に関する授業」科目数の割合。 (各学年での受講科目数が異なるので、グラフに示される緑色部の総和とは異なる)</p>	<p>デザイン学部(平成25年度)</p> <p>「地域に関する授業」は、共通教育科目と専門教育科目の一部にあり、学部4年間全体に占める割合は5.8%(専門教育科目のみ:5.2%)である。2年後期に空間・製品・コンテンツ・メディアの専門コースに分かれ、3年後期までに「デザイン総合実習Ⅰ～Ⅲ」を設けている。なお、「地域志向」課題の割合は全体の約3割である。</p>	<p>デザイン学部(平成29年度)</p> <p>「COCカリキュラム」としての学部連携教育を行ない、専門教育科目の「地域に関する授業」割合の増加を図る。学部4年間で11.5%(専門教育科目のみ:12.2%)に拡げる。また、「デザイン総合実習」を再編し、専門コースごとに地域課題に取組み、「地域志向」課題の割合を全体の5割程度に引き上げる。</p>
<p><b>看護学部のカリキュラムの状況</b></p> <p>■: 地域に関する授業 文中の数値(%)は全科目数に対する「地域に関する授業」科目数の割合。 (各学年での受講科目数が異なるので、グラフに示される緑色部の総和とは異なる)</p>	<p>看護学部(平成25年度)</p> <p>専門教育科目の「専門科目」は、「概論」、「援助論」、「技術論」および、「実習」から成る。実習先は、地域の医療施設や保健・福祉施設があり、「地域に関する授業」が学部4年間全体の16.3%(専門教育科目のみ:19.8%)を占める。</p>	<p>看護学部(平成29年度)</p> <p>「COCカリキュラム」としての学部連携教育を行なう。専門教育科目の「実習」を中心に、学部4年間で「地域に関する授業」の全体に占める割合を23.0%程度(専門教育科目のみ:28.3%)まで高める。</p>
<p>シラバスにおいて地域に関する学修を行うことを明示している授業科目(受講者数、うち「充実していた」の回答者数)</p> <p>平成29年度の科目名の二重下線部は新規開講科目、下線部は「地域に関する学修」を行なうことを新たに明示予定の科目。</p> <p>延べ受講者数・授業評価アンケートにおける「よかった」と回答した延べ人数は、平成24年度の実績。</p> <p>自由科目は、卒業要件には含まれない。</p>	<p><b>共通教育科目(3科目/40科目)</b> 札幌を学ぶ、現代社会と家族、ボランティア活動を考える。 延べ受講者数 234人・延べ回答者数 215人 「よかった」と回答した延べ人数 127人</p> <p><b>デザイン学部 専門教育科目(5科目/97科目)</b> 学外実習A(インターンシップ)、学外実習B(フィールドスタディ)、観光とデザイン、地場産業振興論、ブランド構築。 延べ受講者数:294人、延べ回答者数:194人 「よかった」と回答した延べ人数:104人</p> <p><b>看護学部・専門教育科目(20科目/101科目)</b> 健康教育指導法、在宅看護学概論、在宅看護援助論、地域看護学概論、地域看護援助論、地域看護技術論、ヘルスプロモーション活動論、地域保健学概論、保健医療福祉行政論、環境保健、認知症ケア、寒冷地医療、看護初期実習、老年看護学臨地実習Ⅰ、老年看護学臨地実習Ⅱ、在宅看護学臨地実習、精神看護学臨地実習、小児看護学臨地実習、地域看護学臨地実習Ⅰ、地域看護学臨地実習Ⅱ。 延べ受講者数:1,567人、延べ回答者数:935人 「よかった」と回答した延べ人数:767人</p> <p><b>自由科目(0科目/9科目)</b> (デザイン学部の「学芸員取得」のための科目)</p>	<p><b>共通教育科目(4科目/40科目)</b> 札幌を学ぶ、現代社会と家族、ボランティア活動を考える、<u>スタートアップ演習</u>。</p> <p><b>デザイン学部・専門教育科目(12科目/98科目)</b> <u>学部連携基礎論、デザイン総合実習Ⅰ、デザイン総合実習Ⅱ、デザイン総合実習Ⅲ、学外実習A(インターンシップ)、学外実習B(フィールドスタディ)、観光とデザイン、寒冷地デザイン論、地場産業振興論、ブランド構築、学部連携演習、卒業研究。</u></p> <p><b>看護学部・専門教育科目(28科目/99科目)</b> <u>学部連携基礎論、健康教育指導法、在宅看護学概論、在宅看護援助論、地域保健学概論、保健医療福祉行政論Ⅰ、保健医療福祉行政論Ⅱ、公衆衛生看護学概論、公衆衛生看護援助論Ⅰ、認知症ケア、寒冷地医療、ペリネイタイルケア、ヘルスプロモーション活動論、公衆衛生看護援助論Ⅱ、公衆衛生看護技術論、看護初期実習、在宅看護学臨地実習、小児看護学臨地実習、老年看護学臨地実習Ⅰ、老年看護学臨地実習Ⅱ、精神看護学臨地実習、母性看護学臨地実習、成人看護学臨地実習Ⅱ、ヘルスクエアマネジメント実習、公衆衛生看護学臨地実習Ⅰ、公衆衛生看護学臨地実習Ⅱ、学部連携演習、卒業研究。</u></p> <p><b>自由科目(1科目/10科目)</b> <u>地域セミナー(デザイン・看護学部連携科目)</u></p>

### 3. 研究

#### ■ COC リサーチの推進

本事業では、対象地域の課題解決に寄与する、ウェルネス×協奏型地域社会の構築を目的とした研究を「COCリサーチ」として位置づけ、最重点研究課題とする。「研究部門」が主体となり(p.17を参照)、COCリサーチに対しては全学で競争的研究資金(「地域志向」研究のための研究費補助制度)を新設し、積極的に支援する。また、研究の成果発表のための補助もこれまで以上に充実させる。

「COCリサーチ」の具体的な候補案は、COCカリキュラムへの移行に伴う「地域志向」教育の効果検証に関する研究、地域住民のウェルネスに関する研究(例えば、訪問看護現場における ICT サービスの教育融合や住宅の断熱性と住まい手の健康性の関係など)、地域資源のポテンシャルを活かして賑わいを創出する研究などである。その他、地域志向の特徴が強い研究を全学的に推進する。

#### ■ 地域との共同研究数と教員数の状況

札幌市立大学では、平成 18 年の開学以来、札幌市および関連団体との受託研究、共同研究の件数、教員数は増加の傾向にあり(下表と p.6 を参照)、平成 25 年度以降も引き続き推進する。

	平成25年度(以前の実績も含む)	平成29年度
これまでの実績と今後の見通し 地域への研究成果の還元状況	<p>開学した平成 18 年度から 24 年度までの札幌市および関連団体との受託研究・共同研究の実績である(下図)。経年で増加傾向にある。これらの成果は p.6 の通り、地域に適切に還元されている。</p> <p style="text-align: center;">札幌市立大学の受託研究件数の経年変化</p> <p>平成 25 年度は、「積雪寒冷地におけるゾウ舎のデザイン研究(札幌市)」、「学校保健に関する健康教育導入へ向けての基礎調査(公益財団法人札幌がんセミナー)」などの地域と密接に関わる受託研究や共同研究(合計 6 件)が既に開始されている。(平成 25 年 5 月 19 日現在の実績)</p>	<p>平成 24 年度の実績 11 件の 1.5 倍に相当する 17～18 件程度を全学的に目指す。</p> <p>なお、本事業で推進する「COC リサーチ」の候補案の、「地域志向」教育の効果検証に関する研究、地域住民のウェルネス支援に資する研究(例えば、訪問看護現場における ICT サービスの教育融合や住宅の断熱性と住まい手の健康性の関係など)、地域資源のポテンシャルを活かして賑わいを創出する研究などを積極的に推進する。</p> <p>また、学内の範囲に留まらず、札幌市や関連団体、あるいは民間企業から共同研究、受託研究として推進することを目指す。以上の運営は「研究部門」が行なう(p.17を参照)。</p>
地域との共同研究・受託研究を行う教員数 (平成 25 年度の欄の全教員数 79 人は、学長、副学長、両学部の教授(特任を含む)、准教授・専任講師・助教・助手の総数。平成 29 年度の全教員数を平成 25 年度の 79 人+本事業で雇用予定の特任教員 2 人=81 人と仮定している)	<p>上記で示した研究課題件数と同様に、それに関わる教員数も開学以来、顕著に増加している。平成 24 年度の実績は、全教員の 54.4%(=43 人/79 人)が、地域(札幌市および関連団体)との共同研究・受託研究を行なっている。平成 25 年度より開始されている共同研究・受託研究は、既に 14 人の教員が担当している。(平成 25 年 5 月 19 日現在の実績)</p>	<p>平成 24 年度の実績 54.4%の 1.5 倍に相当する 81.6%以上(=66 人/81 人)を全学的に目指す。なお、「COC リサーチ」推進の主体は「研究部門」が担う(p.17を参照)。</p>

#### 4. 社会貢献

##### ■ COC タウンアカデミーの企画・運営

本事業では、対象地域の課題解決に寄与する、ウェルネス×協奏型地域社会の構築を目的とした社会貢献の活動を「COC タウンアカデミー」と呼び、「社会貢献部門」が主体となって(p.17を参照)、全学的に活動し、以下の1)~4)の事業を行なう。

- 1) 市民(地域住民)向けの公開講座・セミナー事業:「真駒内夜学校」の開講
- 2) 多世代・多セクターの交流事業:「真駒内たまり場・しゃべり場」の開設と運営
- 3) 地域住民が主役となる生涯学習事業:「真駒内シニア・アカデミー」の開校
- 4) 幼・小・中・高一連携公開講座の運営



「真駒内夜学校」・「真駒内たまり場・しゃべり場」・「真駒内シニア・アカデミー」は、真駒内 COC キャンパスの耐震改修工事が終了後(平成 26 後半~27 年度)に開始する。シニア・アカデミーは、平成 25 年度は人材発掘、翌年度はその試行にあて、提供する話題は、南区の歴史や特徴、生活支援などを検討している。

なお、地域住民への円滑な情報周知のために「広報部門」が主体となり、南区の広報誌などにイベント告知や企画プログラムを定期的に載せ、イベントの開催時にはシャトルバスを南区で循環させ参加者を募る。

##### ■ 地域向け公開講座・セミナーの状況

事業	平成 25 年度	平成 29 年度
1) 市民(地域住民)向け公開講座・セミナー事業	<b>市民公開講座・セミナー(サテライトキャンパス他)</b> サテライトキャンパス他を会場に、合計:7 コース 14 コマ(本学主催:3 コース 6コマ、他団体との共催:4 コース 8コマ)を開催している。  市民公開講座	<b>市民公開講座・セミナー(真駒内 COC キャンパス)</b> 主催、共催併せて5コース 10コマ以上の開催を目指す。まちづくりセンター(真駒内・石山・芸術の森地区)、札幌芸術の森、北海道立総合研究機構、札幌市青少年科学館、サイエンスコンソーシアム札幌などとの連携による公開講座を実施する。 <b>市民公開講座・セミナー(サテライトキャンパス)</b> 主催、共催併せて5コース 10コマ以上の開催を目指す。
地域向けの公開講座・セミナーの実施教員数	<b>上記の公開講座・セミナーのうち、地域向けのテーマによる実績</b> 延べ9人(教員全員 79 人中 9 人、11.3%)の実績がある。	<b>真駒内夜学校(真駒内 COC キャンパス他)</b> 平成 29 年度までに 81 人全員(教員 81 人中 81 人、100%)が実施する。全教員が関わることから 100%を目指す。「真駒内夜学校班」が主体となって運営する(本事業で雇用予定の特任教員 2 人を含む)。
2) 多世代・多セクター交流事業	<b>ボランティア活動</b> 看護学部の教員・学生ボランティアによって、札幌市中央区(桑園地区)からの要請に応じて、地区運動会などの運営支援を5回ほど実施予定である。	<b>ボランティア活動</b> 引き続き実施し、多世代・多セクター交流を図る。 <b>真駒内たまり場・しゃべり場(真駒内 COC キャンパス)</b> 地域の高齢者を対象とした学びの場を設置する。
3) 地域住民が主役となる生涯学習事業	実績はない。	<b>真駒内シニア・アカデミー(真駒内 COC キャンパス)</b> 年間 6 回以上実施する。
4) 幼・小・中・高一連携公開講座	<b>高大連携公開講座(桑園キャンパス他)</b> 看護学部で、札幌市立高校の生徒を対象に専門科目を開講している。  高大連携講座 開講式 デザイン学部は、デザインアートコースのある市立高校にて本学学長の全学講演を実施した。 <b>その他の公開講座</b> 「幼児の遊び」を中心とした公開講座を札幌芸術の森で実施する予定。	<b>高大連携公開講座(桑園・真駒内 COC キャンパス)</b> 引き続き、看護学部の高大連携公開講座は実施する(桑園キャンパス)。COC タウンアカデミーの一環としてデザイン学部・看護学部で各 1 回実施する(真駒内 COC キャンパス)。 <b>その他の公開講座(真駒内 COC キャンパス)</b> 地域の幼・小・中学校の幼児・児童・生徒を対象にした公開講座をデザイン学部・看護学部で各1回程度実施する。

IV. 地域を志向した具体的な取組【「Ⅲ. 地域を志向した教育・研究・社会貢献の現状とその達成目標」とあわせて10ページ以内】	
<p>Ⅲを達成するための具体的な計画を記入してください。「本申請における取組計画」には、補助期間中の取組計画を記入してください。(補助期間が5年間であれば、平成25年度～平成29年度の実績計画。年度毎に記入する必要はありません)</p> <p>教育・研究・社会貢献のそれぞれについての取組であることがわかるように記入すること。なお、教育カリキュラム・教育組織の改革については必ず言及すること。</p>	
<p>&lt;現状&gt;</p> <p>■ 教育</p> <p>1)両学部の連携による取組</p> <p>科目の課題設定:「スタートアップ演習」、「学部連携演習」は、両学部の学生20人程度+教員2人を1チームとして、看護とデザインの複合課題全般を対象に実施している。それぞれ地域課題等の解決に取り組み、成果を挙げるチームもあったが、対象地域、対象者が絞り切れていないことが原因で、提案内容についてリアリティが不足している場合が多い。</p> <p>学年間の接続課題:「スタートアップ演習」は、異分野連携の体感・課題発見が達成目標で、その後、それぞれの専門教育を基盤にして、「学部連携演習」での実践となる。しかしながら、異分野連携における基礎的な方法論を学ぶことがないまま実施している状況にあり、地域志向型の人材育成のためには改善が必要である。</p> <p>評価方法:学生がプレゼンテーション形式で成果発表を行ない、教員がそれを評価している。しかし、連携教育における評価基準には改善の余地がある。さらに教員はプロセスや課題への参加態度は評価できるが、実社会における多様な価値観を基準にした評価と、それを学生にフィードバックする仕組みが確立していない。</p> <p>2)デザイン学部の取組</p> <p>専門教育科目「デザイン総合実習Ⅰ～Ⅲ」を開講している。その課題内容の全てにおいて「地域志向」の割合は3割ほどである。また、デザイン学部の全開講科目において「地域志向」の科目数は全科目の5.8%で少ない。</p>	<p>&lt;本申請に係る事業に関する取組計画&gt;</p> <p>1)両学部の連携による取組</p> <p>科目の課題設定:「スタートアップ演習」、「学部連携演習」では、本事業で集中地域に設定する「札幌市南区」に潜在するデザイン・看護の複合的な課題の発見と解決に取り組む。平成27年度以降は、真駒内COCキャンパスを活用した地域住民へのヒアリング、調査、実験等を展開する。また、本学大学院生を積極的にTAとして活用し、地域住民を招いて演習を実施する。</p> <p>学年間の接続課題:2年次に「学部連携基礎論」を新設する。「スタートアップ演習」の成果を基盤とし、異分野連携による共同研究の経験豊富な教員からの方法論の教授を行なう。また、4年間を通じて自主的に地域課題に取り組む自由科目として「地域セミナー」を新設する。また、以上の改編が4年次の「卒業研究」に円滑に接続することを図る。</p> <p>評価方法:連携教育の評価基準の観点を、「課題発見力」、「協調性+企画力」、「交渉力+コミュニケーション力」、「実践力」とする。例えば、以上の観点について自己評価+他己評価(同じチーム内のメンバーによる投票)手法を導入し、成績評価の参考資料にする。なお、プロセス評価に加え、実社会で通用するか否かの(地域住民の参加などによる)アウトカム評価を実施し、新たな評価体系を構築し、それを学生にフィードバックする仕組みを確立する。</p> <p>2)デザイン学部の取組</p> <p>「デザイン総合実習Ⅰ～Ⅲ」での地域課題の割合を全体の半分程に高める。さらに、実習以外の専門教育科目を対象に、専門性に特化した内容だけでなく「地域志向」の課題を積極的に導入し、全開講科目に対する「地域志向」の科目割合を10～15%増を目指す。</p>

デザイン学部各コース(空間・製品・コンテンツ・メディア)の専門教育科目には、看護学部で展開されている専門教育科目の内容を視野に入れ、連携をしている科目は(「学部連携演習」以外には)全くない状況である。

### 3)看護学部の取組

看護専門科目において、「地域」を志向している科目は、在宅看護学領域や地域看護学領域が主である。健康教育指導法では中央区の組織をアセスメントし、健康講話の演習を実施している。また、地域特性を生かした寒冷地医療などの選択科目を置いている。

演習科目や技術試験では、本学が地域住民に公募を行ない養成した模擬患者を活用している。平成 25 年度は 18 科目の講義演習で模擬患者の活用を予定している。また、「がん看護学」「在宅看護援助論」では患者体験・介護体験のある市民をゲストスピーカーに、「環境保健」「保健福祉行政論」では、行政の専門家を招いて地域の課題についての講義を実施している。

臨地実習では、看護初期実習や老年看護学臨地実習Ⅰ、在宅看護学臨地実習、精神看護学臨地実習、小児看護学臨地実習で、介護予防センター、健診センター、健康づくりセンター、老人福祉センター、訪問看護ステーション、デイケア、保育園などの施設で実習することにより、地域で生活している住民の健康課題、地域の課題などについて考えさせている。また、地域看護学臨地実習では、4 単位の中で行政や産業保健、学校保健の実習を行っている。演習や実習においては、市内の医療・福祉・保健施設の看護職を専門分野の教授や指導者として活用している。

### ■ 研究

本学では、これまで札幌市などの地域と密接に関わる研究(個人研究、科研費による研究、受託研究など)が数多く進められてきた。平成 25 年度は以下の研究が既に開始されている。

**実績①:** 科学研究費補助金基盤研究 A「タイム・ス

看護学部との連携を想定した「インタラクティブデザイン」では、真駒内 COC キャンパスに居宅のシミュレーションスペースと模擬の訪問看護事業所を置き、ICT を用いた遠隔看護システムを双方に設置し、一般市民が利用できる ICT の運用の在り方や課題の発見、その解決方法の検討などの演習を行なう。

### 3)看護学部の取組

患者や対象者の生活支援が必要と思われる看護の専門科目については、シラバスで「地域志向」を意識した内容に見直し、講義、演習を展開する。臨地実習においても、同様とする。

真駒内 COC キャンパスを活用した科目として「健康教育指導法」では、従来の協力組織から南区に拡張し、事業で展開する「学びの場」を活用した健康教育の実践など、より地域住民の健康に寄与する内容とする。また、この講義展開の方向が構築された後には、中央区でも同様に展開していく。

また、「在宅看護技術論」、「在宅看護学臨地実習」では、真駒内 COC キャンパスの教室に居宅のシミュレーションスペースと模擬の訪問看護事業所の場を設定して、模擬患者を活用した模擬療養者へのケアの実際や ICT を活用した模擬訪問看護事業所との連携などの演習を展開する。

さらに、「公衆衛生看護学臨地実習(地域看護学から名称変更)」では、実習単位数を 5 単位に増やし、実習内容も地域課題の抽出や保健事業の計画評価、危機管理を含め、地域づくりをより強化した実習とする。

地域住民を対象とした模擬患者の養成は継続して行い、演習や試験などでの活用回数を増やして行く。また、市民や行政、専門職などが講義や演習に参加する機会を増やし、より実践的な場を学習環境の中に作り出していく。

札幌市を対象にした、ウェルネス×協奏型地域社会の構築のための研究を、自治体と連携・協力してさらに積極的に取り組む。例えば、デザインと看護の連携によって、地域住民のウェルネス支援研究を推進する。

特に、学長のガバナンス強化の方針の一つとして、

ペースシェアリング型地域連携による地域創成デザイン研究」が交付され、研究が開始されている。

**実績②:** 札幌市南区と連携し、南区の地域活性化に関する研究を遂行する。具体的には「シーニックバイウェイ」の活用方法ならびに地区行事である雪あかりイベントの企画提案を行なっている。

**実績③:** 札幌市円山動物園とは、平成 18 年度より動物園の活性化のために研究を受託してきた。「類人猿館」の施設改修デザインや「は虫類・両生類館」、「アジア／アフリカゾーン」のデザイン研究の成果を受けて、様々な提案ならびにその実現に寄与してきた。平成 25 年度は「積雪寒冷地におけるゾウ舎のデザイン研究」の受託研究を遂行している。

**実績④:** 平成 23 年に札幌市より「路面電車を活用する地域創成デザインに関する研究」を受託した。その研究成果を受けて、札幌市では、平成 25 年度より新型低床車両の導入、平成 26 年度からは、市街地活性化のための路線のループ化の実現を目指している。

**実績⑤:** 老年看護領域ではこれまでも札幌市に在住する高齢者の意識調査を行ない、高齢者の主観的幸福感に関する研究を実施してきた。平成 25 年度は高齢者の住みやすい生活を生み出すために高齢者を見守る立場にある看護師等の医療関係者と福祉関係者が共に学び地域を支える老年看護学と医療福祉学の連携の研究を進める。

**実績⑥:** 札幌市(市長政策室)の公募型採択研究で、地中熱暖房と「コミュニティ暖房」の可能性に着目した研究が(平成 24 年度)に採択され、平成 25 年度も札幌市より研究の継続を求められている。

## ■ 社会貢献

### 1) 市民公開講座・セミナー事業

平成 25 年度はサテライトキャンパス(中央区)にて、一般市民向けの公開講座の開催を 3 コース 6 コマ予定している。「私たちのセーフコミュニティ」(全 4 回)、「札幌芸術の森: その樹木・森林・彫刻に触れる」(全 1 回)、「利用再生エネルギー景観をデザインする」である。その他、「潜入! 改修工事

学長裁量性を高める。例えば、学内競争的研究資金の共同研究課題の対象地域を、本事業で対象とする札幌市、特に「南区」に設定して公募し、異分野連携研究を推進する。以下はその課題案である。

### 案① 「地域志向」型教育の評価方法の開発

ウェルネス×協奏型地域社会の構築に向けた COC カリキュラムの効果検証を目的とし、横断型(年度ごとの経年比較)、縦断型(学生個人の成長度の比較)が可能な、【集団評価とその可視化および学生へのフィードバック手法】の開発・運用・評価を行う。

### 案② 地域住民のウェルネス支援のための地域研究

ウェルネスの概念を取り入れた、地域住民を対象にした生涯学習プラットフォームを構築し、その成果を地域に還元し、効果検証を行なう。

### 案③ ICT を用いた遠隔看護をテーマとした教育手法の開発

健康不安の解消を含めた「ICTを用いた遠隔介護」システムの開発研究をこれまでも行ってきたが、本研究成果をベースに、学生の体感を伴う、訪問看護模擬実践(看護学部)、ICT サービス普及及び模擬運用(デザイン学部)を通じた融合教育手法の開発・運用・評価を行なう。

### 案④ 真駒内駅前地区での住環境教育とコミュニティ暖房に関する研究

南区の真駒内駅前地区は、ゴミ焼却熱を活用した地域熱供給システムが採用されている。しかし、最近、ごみ分別促進による焼却量減少のため、熱供給量が需要を賄えない事態を招いている。それを再検討すべく、町内会やマンション管理組合との協働による住宅の熱環境について学ぶ住環境教育を展開し、小規模な「コミュニティ暖房」への移行の可能性を明らかにする。

### 1) 市民公開講座・セミナー事業

市民公開講座・セミナーは、これまでと同様にサテライトキャンパスで継続して実施する。それに加えて、南区では真駒内 COC キャンパスにおいて、まちづくりセンター(真駒内・石山・芸術の森地区)、札幌芸術の森(札幌市芸術文化財団)、札幌市円山動物園(札幌市環境局)、北海道立総合研究機構、札幌市青少年科学館、

中の豊平館」を春・秋・冬の計6回開催する。また、「円山動物園の新施設 “アジアゾーン”を知ろう！～おとなの社会科見学～」も予定している。

## 2) ボランティア活動

札幌市中央区(桑園地区)のボランティア活動として、地域からの要請に応じて、地区の運動会、文化祭などのサポートなどに学生と教員が参加している。

## 3) 地域の人材活用

看護学部では、平成18年の「看護 OSCE\*」の導入にあたり、札幌市内の模擬患者団体に依頼し開始した。翌年に地域住民に公募をかけ、本学で活用する模擬患者の育成研修会を行なった。2年で約90人が受講し、現在23人が模擬患者として登録し、看護学部の演習等に参加している。平成25年度は18科目の演習で活用を予定している。

また、「がん看護学」、「在宅看護援助論」、「環境保健」、「保健福祉行政論」で、患者体験・介護体験のある市民の招聘や、行政の専門家に講義を依頼している。

## 4) 高大連携講座・オープンキャンパス

高大連携講座とオープンキャンパス(毎年6月と9月)を実施している。平成25年度は、札幌市立高校の生徒対象の模擬講義をデザイン、看護学部において各1回行う。また、看護学部では5科目の講義で、高校生が大学生と共に受講する「高大連携公開講座」を実施している(平成25年度は6高校から25人参加)。また、高等学校への出張授業は、両学部(1校)、デザイン学部(7校)、看護学部(4校)である。

また、札幌市内の近隣の中学校(1校)では、デザインに関するワークショップ型公開講座を実施している。

\*看護 OSCE:看護教育における客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination)(p.26を参照)。

サイエンスコンソーシアム札幌(市民団体「札幌科学談話会」・札幌市中央図書館・札幌市博物館活動センターの共同体)などの機関や団体と連携して市民講座・セミナーを実施する。

## ・「真駒内夜学校」

上記の講座・セミナーに加えて、札幌市立大学の全教員による地域住民対象の講座:「真駒内夜学校」を開講する。講義の内容や講師の紹介などは、南区の広報誌を活用して定期的に広報・周知を図り、デザイン学・看護学の最先端の講義を地域住民に対して公開する。

## 2) 多世代・多セクター交流事業

### ・「真駒内たまり場・しゃべり場」の設置

少子・高齢化が進行する中で、生活の質(QOL)を維持・向上できるような仕組みの一つとして、地域住民を対象にした相互学習の「たまり場・しゃべり場」を札幌市と連携して開設・運営する。習うこと、教えること、議論しあうことを多世代が交流して行なうことにより「元気になるしあうこと」が高揚するしるきを多様に展開する。平成27年度より実施し、学生の地域課題の発表会や卒業研究展とも連動させて実施する。それによって、本学学生のコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の養成にも寄与することが期待できる。

## 3) 地域住民が主役となる生涯学習事業

### ・「真駒内シニア・アカデミー」の企画・運営

模擬患者などのすでに繋がりのある地域住民を「真駒内シニア・アカデミー」の講師として活用する。他機関と連携して、地域に潜在している専門的な能力や才能の持ち主を発掘し、地域住民が主体となる生涯学習事業を真駒内COCキャンパスで実施する。また、模擬患者をシニア・アカデミーの講師として活用することも視野に入れ、地域住民と本学の学生・教員が共同で企画を立案し、展開する。

## 4) 幼・小・中・高一 大連携公開講座

これまでの高大連携講座とオープンキャンパス(毎年6、9月)の実績を引き継ぐ。平成29年度までには、高校生以下の世代をも対象にした公開講座を実施し、地域住民の多くに本学について興味や関心をもってもらえるようにする。

### V. 学内の実施体制等【2ページ以内】

#### 1. 学内の実施体制の整備

今回の申請に当たり、学長を中心として、学内の実施体制をどのように整備したか記入してください。特に、地域の声を受け止める体制の整備については必ず記入してください。

##### <現状>

札幌市立大学における地域貢献に関する取り組みは、本学の附属研究所である「地域連携研究センター」が中心となり、公開講座の開催や自治体・外部機関等からの研究の受託等を行なっている。また、各学部・研究科においても自治体や外部機関と連携した教育・研究活動を実施している(p.4, p.12を参照)。

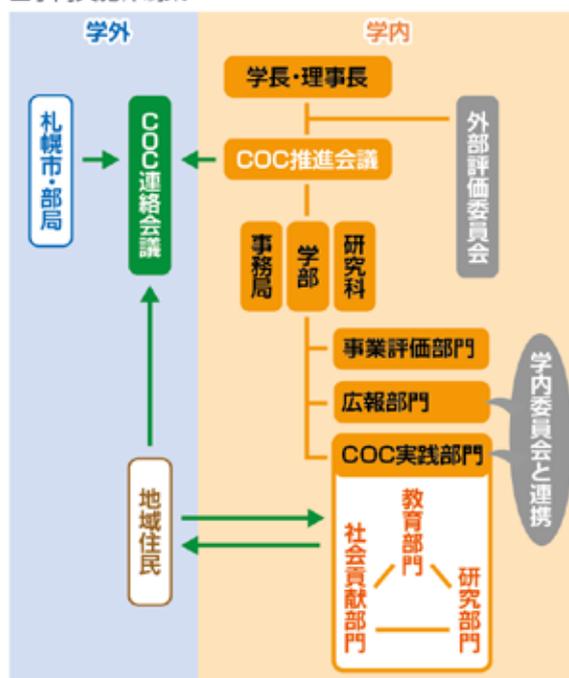
##### <本申請に係る事業に関する体制>

本事業の実施に当たり、学内においては、学長(理事長兼任)を事業責任者として「COC 推進会議」を新設する。COC 推進会議は、事業担当責任者の下に、デザイン・看護学部、デザイン・看護学研究科、事務局による「事業評価部門」・「広報部門」・「COC 実践部門」を構成し、学内委員会と連携して活動する。

「COC 実践部門」は、「教育部門」・「研究部門」・「社会貢献部門」から成り、教育(COC カリキュラム)、研究(COC リサーチ)、社会貢献(COC タウンアカデミー)の各事業を推進する。特に、本事業を円滑に実施するため、専任スタッフとして新たに特任教員(1~2人)及び臨時職員(1~2人)の雇用を予定している。

さらに、本事業を着実に推進していくための学外との連携においては、札幌市の関係部局や地域住民(町内会など)と本学で構成する「COC 連絡会議」を設置する。「COC 連絡会議」は、定期的に年2回程度開催し、事業運営に関する連絡・調整を図り、地域や事業参画者の意見を反映させる。

■学内実施体制案



## 2. 評価体制の整備

評価指標の適切性の判断や成果目標の達成状況など、事業の進捗状況を評価する仕組みについて、補助期間中及び補助期間終了後の体制を具体的に記入してください。特に外部評価の仕組みについては必ず記入してください。

### 【補助期間中】

本事業の進捗状況は、「COC 推進会議」の各部門が半期及び年度終了後に評価する。年度終了後については、各部門が評価結果を全体統括のCOC推進会議に報告し、COC 推進会議は、事業全体の進捗状況を評価する。

第三者による外部評価としては、①評価委員会(有識者等による外部委員)による評価、②成果報告会等の参加者(札幌市関係部局、外部機関を含む)による意見交換会、③事業参加者へのアンケート調査による評価を受け、その成果や課題を公表する。

また、連携する札幌市や NPO 法人、地域の町内会等と本学で構成する「COC 連絡会議」において、定期的に意見交換を行なう。COC 連絡会議において出された意見や要望を事業に反映させていくほか、COC 連絡会議で事業に関する評価も行ない、それを事業改善のためにフィードバックする。

### 【補助期間終了後】

補助期間中と同様の評価体制を維持し、事業の進捗状況を把握し、改善へのフィードバックを継続する。

VI. 自治体等との関係(複数の自治体と連携・協力する場合は全ての自治体について記入すること)【3ページ以内】	
1. 自治体との連携・協力及びその体制の整備 ①これまでの自治体との連携・協力の実績と本申請に関連した自治体との連携・協力について記入してください。	
<p>&lt;現状&gt;</p> <p>札幌市立大学の設立団体である札幌市とは、例えば、札幌市円山動物園の動物舎や案内サイン等のデザイン監修や、看護職復職支援の講習会を実施するなど、札幌市の関係部局と協力し、さまざまな施策に連携して取り組んできた。また、医療施設のあり方の検討や地域の活性化に関する研究を本学が札幌市から受託し、市の施策に本学の知見を提供し、地域課題の解決に本学が貢献している状況である(p.6を参照)。</p>	<p>&lt;本申請に係る事業に関する連携&gt;</p> <p>札幌市立大学と札幌市は、毎年度、定期的に大学運営に関する意見交換を実施している。平成24年度については、平成25年3月に本学学長と札幌市長が出席し実施した。この中で、本事業で集中対象地域としている札幌市南区の少子高齢化等の地域課題について、その深刻さや早急な対策の必要性等について、学長と市長の双方から共通する認識が示された。これを受け、本学と札幌市は、南区の課題解決に向けて、本事業を活用し、これまでの本学と札幌市の個々の部局との連携・協力ではなく、本学と札幌市のさまざまな部局が横断的に協力できる体制を構築し、地域課題に取り組んでいくこととした。</p> <p>具体的には、平成25年5月9日に開催された、南区のまちづくりに関係する札幌市の部局の部課長で構成する会議に本学も参加し、本学に期待される役割や本学への具体的な支援内容等について協議がなされた。今後は、この会議を本学と札幌市が連携して設置する「COC 連絡会議」へ発展的に引き継ぎ、本事業を円滑に実施できるよう札幌市が支援していくことを確認した。</p>
②自治体からの人的・物的・財政的支援について、現状に加えて、更なる支援の充実が図られていればそのことがわかるよう、明確に記入してください。	
<p>&lt;現状&gt;</p> <p>札幌市立大学は、その設立団体である札幌市より、事務局職員の派遣(9人)を受けているほか、大学運営費交付金の交付、まちづくり等の施策に関連した研究費や施設整備にかかる補助金の支出等の支援を受けている。</p>	<p>&lt;本申請に係る事業に関する支援&gt;</p> <p>本事業の実施に際し、札幌市から、1)真駒内駅前地区(南区)のまちづくり検討への本学の参画、2)まちづくりに関する調査費用の本学への支出、3)事業実施の拠点となるスペース(統廃合で閉校になった小学校施設)の提供、4)拠点スペースなどで展開する各種事業の共同実施、5)本学と札幌市がコアとなり、地域住民やNPOなどさまざまな関係者がまちづくりについて意見交換を行なう常設会議の設置、6)これらの活動全体に関する札幌市が持つ人や組織のネットワークの活用と連携など、従来からの支援に加えて、人的・物的・財政的な面で全面的に支援を受けることが確約されている。</p>

③今回の申請にあたり、自治体との連携・協力体制をどのように整備したか記入してください。

<現状>

札幌市立大学の運営全般に関して、設立団体である札幌市の担当部局である「市長政策室」と緊密に連絡・調整を図っている。

<本申請に係る事業に関する体制>

札幌市が副申を行なうに当たり、札幌市における様々な課題を札幌市と本学が共有し、事業実施に向けて今後協力していくことを確認するために、札幌市から市長、副市長、南区長、関係局長、本学から学長、副学長、部局長が出席し、平成25年5月15日に札幌市役所で意見交換の会議を開催した(最下段の写真)。

この会議では、対象地域である札幌市全域と南区が抱える課題について確認するとともに、本学の申請概要について説明し、札幌市からの人的・物的・財政的支援内容(p.19の②右段1)～6)の項目)や今後の連携の確認を行なった。以上から、本学とともに地域課題の解決に取り組む札幌市の意思が示された。

今後は、節目の時期に本学学長と札幌市長の意見交換の場を引き続き設けるとともに、事業の具体化に向けては、前記1)の「真駒内駅前地区(南区)のまちづくり」等について、札幌市の関係部局と本学の教職員による「COC 連絡会議」を行ない、本学と札幌市の連携・協力を維持・強化していく体制としている。



札幌市立大学(蓮見孝学長)と札幌市(上田文雄市長)らによる意見交換  
(平成25年5月15日:札幌市役所)

## 2. 地元企業、NPO 等各種団体・機関との連携・協力及びその体制の整備

これまでの地元企業、NPO 等各種団体・機関との連携・協力の現状と本申請に係る事業に関する連携・協力について記入してください。その際、地元企業、NPO 等各種団体・機関からの人的・物的・財政的支援がある場合、又は今後見込める場合は、その支援について記入してください。

また、今回の申請にあたり、地元企業、NPO 等各種団体・機関との連携・協力体制をどのように構築したか記入してください。

## ＜現状＞

・**北海道立総合研究機構**：平成 24 年 7 月に連携協定を締結した。本学の研究と機構で展開している研究、あるいは同機構のネットワークを通じて、産学連携の拡大を模索している。

・**中小企業家同友会産学連携研究会 (HoPE)**：中小企業家同友会の参加企業・札幌市・公設試験場・大学が、産官学連携を進めるために月 1 回異業種交流会を実施している。地域連携研究センターの学内委員が同研究会に参加し、ネットワークを拡げている。平成 24 年度には、学長ならびにセンター長が研究会にて講演した。研究会の会場の一つに本学のサテライトキャンパスを提供して連携を深めている。

・**財団法人札幌芸術文化財団(札幌芸術の森)**：平成 24 年 3 月に連携協定を締結した。これまで学生の教育、インターンシップへの協力を受けていた他、グッズの開発、事業の企画実施、ホームページ支援等の連携をしていた。平成 24 年度は共同開催の公開講座、大学図書館における連動企画展を行なった。また、評議会に本学教員を派遣している。

・**公益財団法人札幌市生涯学習振興財団**：札幌市の外郭団体で生涯学習事業を展開している。本学教員を講師として派遣しているほか、共同開催の公開講座を毎年実施している。

・**札幌シーニックバイウェイ藻岩山麓・定山溪ルート運営代表者会議**：札幌市南区でシーニックバイウェイの指定ルートとなっている地域の魅力向上のための活動を実施し、本学も参加団体の一員となっている。シーニックバイウェイの延長で芸術の森地区町内会共催の「雪明りの祭典」があり、ARTOU(学生有志)として実施している。

・**SCU 産学官研究交流会**：(札幌市立大学×札幌市×北洋銀行×北海道立総合研究機構×中小企業家同友会)を運営している。また、**ものづくりテクノフェア**(北洋銀行主催)、**環境総合展**(札幌市主催)、**ビジネス EXPO**(ノーステック財団主催)に出展している。

## ＜本申請に係る事業に関する連携・支援、体制＞

・これまでも「スタートアップ演習」、「学部連携演習」の学修の課程で地域をテーマに設定した場合、課題発見、検証の過程において地元企業、町内会、中小企業家同友会、北海道立総合研究機構などに連携・協力を依頼した実績がある。このため、今後も「COC カリキュラム」を進めるにあたって、連携・協力を依頼できる状況にある。

・市民公開講座や「真駒内夜学校」の広報活動については、札幌市に加えて、北海道立総合研究機構、中小企業家同友会等の行政ならびに産業界の協力を依頼できる。また、真駒内 COC キャンパスにおいて講座を実施する場合、財団法人札幌市生涯学習振興財団、札幌シーニックバイウェイ藻岩山麓・定山溪ルート運営代表者会議と連携し、企画、集客面における協力体制を構築することができる。特に、真駒内駅前地区は、シーニックバイウェイの起点になる場としての効果が期待されている。よって、本事業によってこれまでの成果をさらに高めることが期待できる。

・「真駒内たまり場・しゃべり場」の運営については、今後の高齢者社会を鑑み、中小企業家同友会産学連携研究会(HoPE)やNPO 法人「北のユニバーサルデザイン協議会(NUDA)」などと連携・協力が期待できる。

・上記以外の市民講座・セミナーを開催するにあたり、これまで連携してきた財団法人札幌芸術文化財団(札幌芸術の森)、財団法人札幌市生涯学習振興財団に加え、提携している北海道立総合研究機構、あるいは中小企業家同友会産学連携研究会(HoPE)のメンバーに講師を依頼することや、共催することも可能な状況にある。併せて、広報活動においては、上記の各種団体からの協力が期待できる。

・札幌市内の他大学との大学間連携を強力に進め、ウェルネス×協奏型地域社会の構築のためのコンソーシアム形成を図る。

**Ⅶ. 事業実施計画等【4ページ以内】**

## 1. 事業実施計画

補助期間中の年度ごとの事業実施計画について具体的に記入してください。

**平成 25 年度**

**【全体】** 1)真駒内 COC キャンパスの設置準備室を芸術の森キャンパスに設置し、平成 27 年度の使用開始までの準備を行なう(平成 26 年度までに札幌市が旧真駒内緑小学校の耐震改修工事を行ない、その後、札幌市から札幌市立大学に改修施設の一部の空間が提供される予定)。さらに、その準備調整を担当する特任教員 1 人、臨時職員 2 人の雇用をする。2)札幌市と「COC 連絡会議」を開催し、平成 26 年度以降の具体的な実行プランを協議する。

**【教育】** 1)平成 25 年度中に、次年度のシラバスに「地域志向」を反映させるように学内周知・調整をする。2)専門教育科目を対象に「地域志向」の科目割合を増やすことを検討する。3)「スタートアップ演習」、「学部連携演習」の演習内容およびアウトカム評価に向けた検討を行なう。

**【研究】** 1)学内共同研究費において「COC リサーチ」の募集準備を行なう。なお、対象地域の高齢者のニーズ調査を「研究部門」が行なう。

**【社会貢献】** 1)ウェルネス×協奏型地域社会の構築に向けた公開講座・セミナー等をサテライトキャンパスで開催するとともに、ウェルネスに関わる企業等の事業所や北海道立総合研究機構との交流事業を実施し本事業の準備を行なう。2)桑園キャンパスで「関係医療機関との連携や看護の高大連携」を行なう。

**平成 26 年度**

**【全体】** 1)札幌市と COC 連絡会議を開催し、平成 27 年度の具体的な実行プランを協議する。2)真駒内 COC キャンパスに常駐予定の特任教員 1 人の追加雇用の準備をする。3)真駒内 COC キャンパスの開設に伴い、準備室を旧真駒内緑小学校に移動する準備、南区内のシャトルバス運行の準備を行なう。

**【教育】** 1)「地域志向」の科目についてはシラバス原稿にその内容を掲載する。2)専門教育科目において「地域志向」の科目割合を増やす。3)平成 28 年度に開始予定の新カリキュラム改編に向けて協議を進める。新設する「学部連携基礎論」、「地域セミナー」の開講準備を行なう。特に、平成 26 年度入学生の「スタートアップ演習」開講時に、平成 27 年度の「学部連携基礎論」の試行について説明し、参加を促す。4)「スタートアップ演習」、「学部連携演習」、「地域セミナー」のプロセス評価ならびにアウトカム評価を検討する。

**【研究】** 1)学内共同研究費において「COC リサーチ」の募集し、「地域志向」研究の推進を図る。2)対象地域の高齢者のニーズ調査を継続する。3)平成 27 年度からの、COC カリキュラムに基づく教育効果の検証研究、地域住民のウェルネス支援の研究、賑わいの創出研究などの準備を始める。

**【社会貢献】** 1)前年度に引き続き、市民公開講座・セミナーをサテライトキャンパスで開催し、ウェルネスに関わる企業等の事業所や北海道立総合研究機構との交流事業を実施する。2)平成 27 年度より本格稼働する真駒内 COC キャンパスにおける企画を立案し、広報を始める。3)平成 27 年度より実施する「真駒内夜学校」の企画立案を行い、広報を始める。4)平成 27 年度より実施する「真駒内シニア・アカデミー」の開講に向けて、講師となる住民の登録を始める。5)平成 27 年度より開設する「真駒内たまり場・しゃべり場」の運用に向けて、環境整備、企画・立案、広報を始める。6)桑園キャンパスで「関係医療機関との連携や看護の高大連携」を行なう。

**平成 27 年度**

**【全体】** 1)札幌市と COC 連絡会議を開催し、平成 28 年度の具体的な実行プランを協議する。2)COC タウンアカデミーの開講時に南区内のシャトルバスを運行する。3)真駒内 COC キャンパスの利用者の交流を促すため、札幌市・関係団体と具体的な方法(例えば、地域住民が交流できるカフェの運営など)を協議する。

**【教育】** 1)2 年次で「学部連携基礎論」を試行する。2)平成 27 年度入学生の「スタートアップ」開講時に、平成 28 年度に開講される「学部連携基礎論」について説明し、参加を促す。3)「スタートアップ演習」、「学部連携基礎論」、「学部連携演習」、「地域セミナー」におけるプロセス評価・アウトカム評価を試行し、検証する。4)「地域志向」の科目割合を増やすとともに、シラバス原稿に「地域志向」の内容を掲載する。

**【研究】** 1)学内共同研究費において「COC リサーチ」の募集し、「地域志向」研究の推進を図る。2)地域志向の教育科目を中心とした教育のプロセスならびにアウトカム評価に係る検証研究を実施する。3)南区民へのアンケートなどを基にしたウェルネス研究を開始する。4)南区に焦点を充てた地域の賑わい創出に関する研究を開始する。

**【社会貢献】** 1)真駒内 COC キャンパスを本格稼働し「真駒内夜学校」を企画・実施し、地域への浸透を図る。また次年度の企画立案を行い、広報を始める。2)前年度に登録した講師を中心に「真駒内シニア・アカデミー」を開講する。また、引き続き、講師となる住民の登録を進める。3)「真駒内たまり場・しゃべり場」を昼間(主に高齢者を対象として)に週1回開催する。利用者の声を聞きながら改善する。4)真駒内 COC キャンパス・サテライトキャンパスにおいて、市民公開講座・セミナーを開催する。5)桑園キャンパスでは「関係医療機関との連携や看護の高大連携」、6)サテライトキャンパスでウェルネスに関わる企業や北海道立総合研究機構との交流事業を実施する。

#### 平成 28 年度

**【全体】** 1)COC 連絡会議を開催し、平成 29 年度の具体的な実行プランを協議する。また、COC 事業終了後の対応について協議を始める。2)COC タウンアカデミー開催時に南区内のシャトルバスを運行する。

**【教育】** 1)新カリキュラムを開始する。「学部連携基礎論」を正規科目として開講する。2)「スタートアップ演習」、「学部連携基礎論」、「学部連携演習」におけるプロセスならびにアウトカム評価を開始し、教育効果の検証に役立てる。3)「地域志向」の科目について、シラバス原稿に「地域志向」の内容を掲載する。

**【研究】** 1)学内共同研究費において「COC リサーチ」の募集し、「地域志向」研究の推進を図る。2)地域志向の教育科目を中心とした教育のプロセスならびにアウトカム評価に係る検証研究を引き続き実施する。3)前年度に実施したウェルネス研究を継続し、南区民へのアンケート結果を分析する。4)南区に焦点を充てた地域の住環境教育・熱環境に関する研究を継続して進める。5)訪問看護現場における ICT サービスの教育融合に関する研究を開始する。

**【社会貢献】** 1)真駒内 COC キャンパスをさらに活用し、「真駒内夜学校」の更なる地域への浸透を図る。また次年度の企画立案を行い、広報を始める。2)登録されている講師を中心に「真駒内シニア・アカデミー」を開講する。また、引き続き、講師となる住民の登録を進める。3)「真駒内たまり場・しゃべり場」の運用を開始し、利用者の声を聞きながら改善する。4)真駒内 COC キャンパス・サテライトキャンパスにおいて、市民公開講座・セミナーを開催する。5)桑園キャンパスでは「関係医療機関との連携や看護の高大連携」を実施する。6)サテライトキャンパスでウェルネスに関わる企業や北海道立総合研究機構との交流事業を実施する。

#### 平成 29 年度

**【全体】** 1)外部評価を行なう。2)札幌市と COC 連絡会議を開催し、COC 事業終了後の具体的な継続プランを協議する。3)前年度に引き続き、COC タウンアカデミー開催時に南区内のシャトルバスを運行する

**【教育】** 1)前年度に引き続き、「スタートアップ演習」、「学部連携基礎論」、「学部連携演習」、「地域セミナー」におけるプロセスならびにアウトカム評価を本格的に開始し、教育効果の検証に役立てる。2)前年度に引き続き、「地域志向」科目は、シラバス原稿に「地域志向」を明確に反映させ、内容の大幅な変更なしに実施できる「地域志向」科目割合を増やす。

**【研究】** 1)学内共同研究費において「COC リサーチ」の募集し、「地域志向」研究の推進を図る。2)地域志向

の教育科目を中心とした教育のプロセス評価・アウトカム評価に係る検証研究を引き続き実施し、改善を行なう。3)ウェルネス研究を継続し、改めて南区民へのアンケートをとり、ウェルネスの改善について調査する。4)南区に焦点を充てた地域の住環境教育・熱環境に関する研究を継続する。5)訪問看護現場における ICT サービスの教育融合に関する研究を継続する。

**【社会貢献】** 1)札幌市中央区にも「たまり場・しゃべり場」、「シニア・アカデミー」を開設し、南区の事例が適用できるかを検証する。2)「真駒内夜学校」の更なる地域への浸透を図る。また次年度の企画立案を行い、広報を始める。3)登録されている講師を中心に「真駒内シニア・アカデミー」を継続開講する。4)「真駒内たまり場・しゃべり場」を実施し、利用者の声を聞きながら改善する。5)真駒内 COC キャンパス・サテライトキャンパスにおいて、市民公開講座・セミナーを開催する。6)桑園キャンパスでは「関係医療機関との連携や看護の高大連携」を行なう。7)サテライトキャンパスでウェルネスに関わる企業等の事業所や北海道立総合研究機構との交流事業を実施する。

事業期間(平成 25～29 年度)および事業終了後のスケジュール

	COC事業期間 (H25～H29)										H30	H31	H32
	H25		H26		H27		H28		H29				
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期			
<b>真駒内 COCキャンパス</b>	登録設備準備室耐震改修工事				試行 本格稼働				COC応援団による地域運営(案) 大学コンソーシアム等				
H23入学(学部3年)													
H24入学(学部2年)				試行									
H25入学(学部1年)			試行			試行							
H26入学			試行		試行								
H27入学					試行								
H28入学													
H29入学													
H30入学													
COCカリキュラム(教育)	調整		試行		地域セミナー(1～4年)								
	準備		新カリキュラム										
	調整		シラバス「地域志向」反映										
	調整		「地域志向」科目割合の評価										
COCリサーチ(研究)	調整		プロセス・アウトカム評価										
	調整		本格開始										
	準備		「COCリサーチ」共同研究費助成										
	準備		教育効果 検証研究										
COCタウンアカデミー(社会貢献)	準備		高齢者ニース調査 南区 ウェルネス研究										
	準備		南区 訪問看護+ICTサービスの教育融合研究										
	準備		南区 コミュニティ暖房+住環境教育 研究										
	試行		「真駒内夜学校」開講										
COC環境整備	人材発掘		「真駒内シニア・アカデミー」開講										
	準備		「真駒内たまり場・しゃべり場」開始										
	準備		中央区(まちづくりセンター・児童会館など)に拡張										
	準備		市民公開講座・セミナー/高大連携										
COC環境整備	教員	特任教員(1人、H26以降 1人追加)											
	事務	臨時職員(2人)											
	バス	南区シャトルバス運用											

凡例	スタートアップ演習(1年前期)
	学部連携基礎論(2年前期)
	学部連携演習(3年後期)
	卒業研究(4年通年)
	地域セミナー(1～4年通年:自由科目)

## 2. 補助期間終了後の継続性について

補助期間終了後の事業の継続性の見通しについて、できるだけ具体的に記入してください。特に、人件費を中心として資金計画については必ず記入してください。(様式3との整合性に留意してください)

### ■教育・研究成果の展開方法と波及効果

#### 1) 教育

本事業期間を活用して、平成29年度時点で運用を行なっている、「COCカリキュラム」の核となる「異分野連携教育」の地域志向性をさらに強めて、地域課題の解決に資する内容にする。特に、学部教育の最終成果物として「卒業研究」への展開を全学的に推進する。

また、5年間におけるCOCカリキュラムの教育改善の検証結果に基づいて、本学のデザイン学部・看護学部のそれぞれの学生が、地域課題に主体的に向き合い、その解決のために必要とされる素養が定着しているかを確認し、事業終了後の運用に継続的に活かす。

#### 2) 研究

本学は札幌市からの運営費交付金を受けていること、「地域貢献」を理念に掲げていることから、補助期間終了後においても、デザインと看護の視点から地域に焦点をあて、地域の課題を解決するための研究を継続していく。このために、従来から予算配置をしていた「共同研究費」を継続し、地域と共に地域課題解決に向けた研究に研究費を配分し奨励を行っていく。

#### 3) 社会貢献

補助期間終了後も高齢者は地域に居住する。については、5年間の実績を踏まえ、課題を整理したうえで、札幌市と協議しながら真駒内COCキャンパスを継続していくことを模索する。また、「真駒内夜学校」「真駒内たまり場・しゃべり場」「真駒内シニア・アカデミー」などの個別の事業については、大学単独の運営から地域住民との協働開催・運営といった方法で継続していく。

真駒内COCキャンパスの運営手法については、真駒内地区のみならず、南区に点在する公共的スペースや学校などへ拡大し、各地域の住民の徒歩圏に生涯学習の場を提供することを想定している。その後、札幌市の残りの9区においても同様の活動を広めていく。場の広がりに伴い、真駒内COCキャンパスまでの南区シャトルバスの借上げは不要となる。

真駒内COCキャンパスの企画運営のために必要とした特任教員2人ならびに臨時職員2人については、事業実施に不可欠であるため、継続して雇用する必要がある。ただし、特任教員2人ならびに臨時職員2人については、真駒内シニア・アカデミーの登録者からボランティアで運営に携わることができる人材を募り、経費圧縮を図る。同時に、本事業に賛同したCOC応援団(企業・行政・地域住民など)にて運営することを模索する。

**Ⅷ. 国公私を通じた大学教育改革支援プログラムの状況及び他の公的資金との関係【1ページ以内】****1. 国公私を通じた大学教育改革支援プログラムの状況**

今まで大学改革推進等補助金による経費措置を受けている場合は、それらの名称及び内容について全て記入してください。その際、現在の取組状況についても記入してください。(1事業について3～4行程度を目安に記入してください。)  
 なお、今回の申請に繋がる取組の場合は、どのように発展・充実させたかわかるように記入してください。

**■質の高い大学教育推進プログラム(教育 GP)****「学年別 OSCE の到達評価と教育法の検討」(平成 20～22 年度)**

本学看護学部における取組みである。4 年間で修得する看護技術内容、到達度及び評価基準を明確にし、認知・精神運動・情意領域を含んだ到達度目標として OSCE を用いて学年ごとに評価を行なっている。その際、模擬患者の参加による演習を全学年に導入し、対人関係能力の育成も重視した。また、現在も OSCE の結果を元に教授法やシラバスを見直し、看護学部教員の教育力を向上させている。

**■大学生の就業力育成支援事業(就業力 GP)****「学社連携による循環型就業力育成プログラム」(平成 22～23 年度)**

本学看護学部における取組みである。初年次教育から、大学と就業施設が協働して、シームレス(垣根のないこと)な看護実践能力を育成し、卒業後のキャリアアップに必要な情報を一元化することを目的に、大学と就業施設が利用可能なシステムとして情報を整備し、現在活用している。

**■産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業****「産官学連携による地域・社会の未来を拓く人材の育成」(平成 24～平成 26 年度)**

北海道・東北地域の 17 大学が協同して、産官学連携による人材育成に取り組んでいる。この事業のもとで札幌市立大学では、早期キャリア教育、往還型研修、ワークショップ型インターンシップの実施やポートフォリオを活用したキャリア支援教育体制、キャリアデータベースの構築等に取り組むとともに、大学・企業連携による地域キャリア連携体制の強化を図っている。

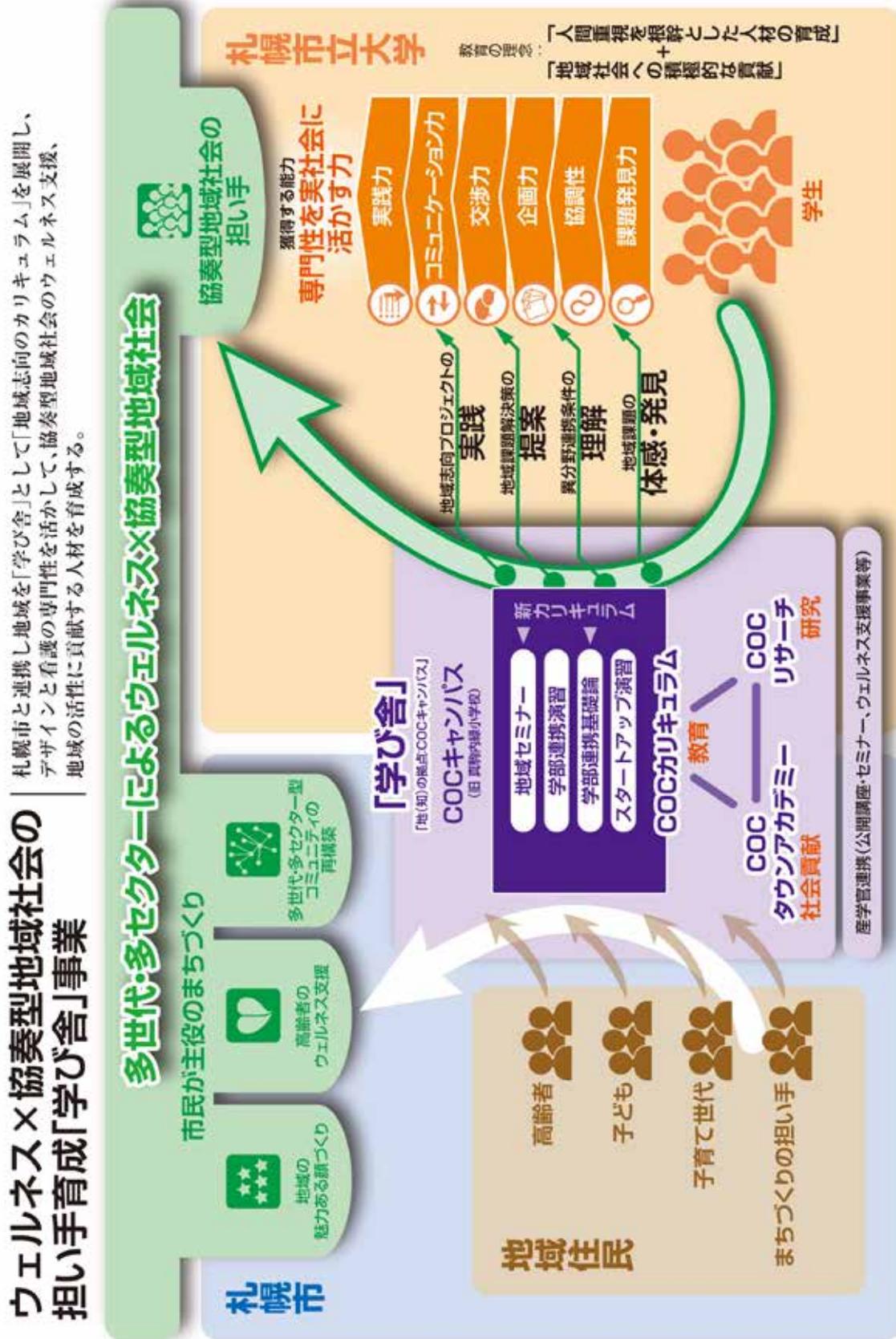
**2. 他の公的資金との関係**

地域再生・活性化に係る他省庁の事業による支援を受けている、又はこれから受ける可能性がある場合は、事業名と本申請との関係を記入してください。

なし。

Ⅸ. 類案発表

事業全体を説明する概要資料を A4 1枚で作成してください。文章のみで説明するのではなく、視覚的に分かりやすいものとしてください。



以下、共同申請の場合のみ提出

**X. 複数大学での連携について【3ページ以内】**

複数大学で連携する必要性、重要性

個々の大学での地域を志向した全学的な教育・研究・社会貢献に加えて、複数大学で連携することの必要性・重要性や利点を記入してください。

「Ⅱ. 「地域」の設定」、「Ⅲ. 地域を志向した教育・研究・社会貢献の現状と達成目標」、「Ⅳ. 地域を志向した具体的な取組」、「Ⅴ. 学内の実施体制等」、「Ⅵ. 自治体等との関係」、「Ⅶ. 事業実施計画等」については、それぞれの項目について、連携することの必要性・重要性や利点を記入してください。

なし。

25文科高第334号  
平成25年8月2日

札幌市立大学長 殿

文部科学省高等教育局長  
布村 幸彦



平成25年度「地（知）の拠点整備事業」選定結果について（通知）

さきに貴学から申請のあった下記事業について、「地（知）の拠点整備事業選定委員会」において審査を行った結果、別紙を遵守することを条件として採択されました。

なお、別紙を踏まえた事業実施が困難である場合は、8月6日（火）までに辞退する旨御連絡ください。

記

事業名称：ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業

【本件問合せ先】

担当：文部科学省高等教育局  
大学振興課大学改革推進室  
改革支援第一係  
電話：03-5253-4111(内線 3321)

## 地（知）の拠点整備事業選定委員長所見

この度、地（知）の拠点整備事業選定委員会は、「地（知）の拠点整備事業」について、本年5月に申請のあった319件（342大学・短期大学・高等専門学校）の事業に関して審査を行った。

採択された52件の事業は、学長の強力なリーダーシップの下で、全学必修科目の新設や大規模な教育カリキュラム・組織の改革など、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を実施することとしており、どれも自治体との課題の共有・強固な連携関係が認められる。また、その達成目標や実施計画も具体的かつ実効性があり、高い成果が見込まれるものとなっている。

なお、採択された事業は、全国38都道府県（未採択都道府県は9県）に広く展開している。それぞれの地域が持つ課題は様々であり、また、それに対応する大学等の規模や分野等も異なっているため、今後の地（知）の拠点となる大学等のモデルを一定程度提示できたと考えている。

一方で、本事業は、今までのいわゆるGP事業のように特定のプロジェクトを支援するものと異なり、大学全体として地域志向に取り組むことが必要となるが、そういった趣旨が大学にうまく伝わらず、趣旨を捉えられず申請された事業も多く見られたのは、残念なことである。

また、採択大学等の設置形態別でみると、国立21校、公立11校、私立16校（単独申請48件中）となった。選定委員からは、設置形態により、背景事情（大学等の設置の経緯、自治体との今までの関係など）や大学の規模が大きく異なるため、比較しつつ、それぞれの状況を踏まえて審査することが難しかったとのコメントもみられた。

本事業は全大学等の約1/4が申請してきたことからみても、大学等の改革意欲は十分に感じられた。一方で、申請数の約1/6しか採択できなかったことから、来年度も新規採択する方向で検討いただくことを強く期待している。今回採択されなかった大学等においては、自治体との連携を強固に構築した上で、学長のリーダーシップの下、学内で真摯に議論し、大学等が「地（知）の拠点」となることの意義について大学全体で再度検討していただきたい。もちろん、今回採択となった大学等の取り組みを参考にすることも有意義である。また、事業の趣旨・内容等不明な点等については、文部科学省の担当部局に確認するなど、積極的な対応を期待したい。

今回、本委員会は、大学全体として地域を志向した教育・研究・社会貢献を行う事業を支援することで、地域の再生・活性化の核となる大学等を形成すべく、①地域と地域課題の設定の適切性、②地域課題を踏まえた地域を志向した教育・研究・社会貢献の達成目標・取組の実現可能性、③学内の実施体制の整備、④自治体との組織的な連携の実質性の観点を考慮して選定を行った。

採択された事業のうち、改善・取り組みの充実を要すると思われる箇所については別途指摘をしているが、改めて採択された各大学等には以下の内容についてお願いしたい。

- ・自治体と課題の共有・連携を密接に行うこと。
- ・積極的に事業の内容を学内や地域に情報発信すること。
- ・補助期間終了後も積極的に事業を推進し、地域の再生・活性化の核となる大学等で在り続けること。

また、残念ながら今回不採択となった大学等についても、地域や大学等の特色を踏まえ、種々の創意工夫ある事業が提案されていたことから、学内資源を活用するなどし可能な限り事業を推進することを願いますとともに、先に述べたとおり、再度「地（知）の拠点」となることの意義について大学全体で検討していただきたい

グローバル化によるボーダーレス化、新興国の台頭による国際競争激化など急激に変化する世界情勢の下、我が国は、少子高齢化の進行、地域コミュニティの衰退、東日本大震災からの復興という国難に直面しており、今こそ、持続的に発展し活力ある社会を目指した変革を成し遂げなければならない。

特に、日本全国の様々な地域での特色ある取組を進化・発展させ、地域発の社会イノベーションや産業イノベーションを創出していくことは、我が国の発展や国際競争力の強化に繋がるものである。

「知の拠点」である大学等は、社会の変革を担う人材の育成、イノベーションの創出など重大な責務を有しており、選定大学等においては、地域自治体と連携し、「地（知）の拠点」として大学全体で全力で地域の再生・活性化に貢献するとともに、大学等の機能強化の実現を期待している。

平成25年8月2日

選定委員長 納谷 廣美

## Ⅱ．事業概要

# ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業の概要

COC 事業担当者  
デザイン学部 教授  
中原 宏

本事業は、札幌市と連携し、廃校となった小学校の一部に地（知）の拠点「真駒内 COC キャンパス」を新設し、ここを多世代・多セクターが学び合う「学び舎」として整備し、「地域志向」の教育・研究・社会貢献活動を推進するものである。

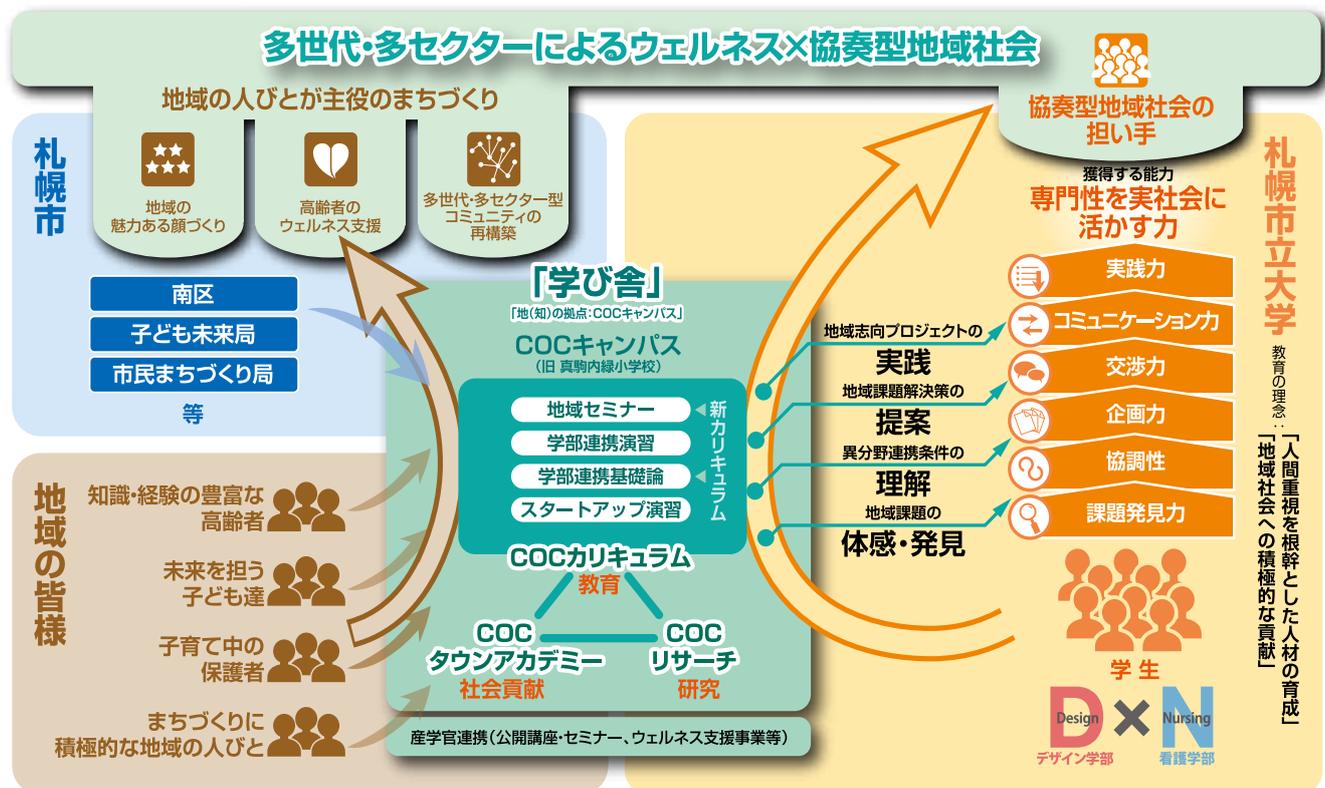
札幌市、とくに南区では、少子高齢化が進み、コミュニティの再構築、地域の魅力ある顔づくり、高齢者のウェルネス支援が課題となっている。この課題解決に向けて、デザインと看護の専門性を有する本学が、ウェルネス支援や地域の活性化に貢献する人材を育成するなど、地域志向プロジェクトを地域住民と協働して展開する。あわせて、本学の学生が、真駒内 COC キャンパスで地域の現状を体感し、課題を読み取り、解決策を提案する過程で、「専門性を実社会に活かす力」を獲得することを目指す。

主な事業の構成は以下のとおりである。

## 【1. 教育：異分野連携教育の拡充と地域志向の強化によるカリキュラム改革】

本事業では、地域志向の教育を「COC カリキュラム」として位置づけ、以下のようなカリキュラム改革に取り組む。

- ① デザイン学部と看護学部の学生が協同して課題解決に取り組む異分野連携科目である「スタートアップ演習（1年次）」と「学部連携演習（3年次）」を、新設する真駒内 COC キャンパスを活用して実施し、地域課題の解決などに取り組む。
- ② 異分野連携における基礎的な方法論の学びを充実させるために、2年次に「学部連携基礎論」を新設し、1年次の「スタートアップ演習」と3年次の「学部連携演習」のスムーズなステップアップを図る。また、異分野連携の自主的な実践力を養成する「地域セミナー」を新設する。



- ③ 現行のデザイン学部・看護学部の専門教育科目のうち、「地域に密接に関わる内容」を、平成26年度からシラバスに明記するよう見直しを行い、全科目における「地域志向」科目の割合を段階的に増やす。

## 【2. 研究：ウェルネス×協奏型地域社会の構築に寄与する研究の推進】

本事業では、対象地域の課題解決に寄与する、ウェルネス×協奏型地域社会の構築を目的とした研究を「COCリサーチ」として位置づけ、最重点研究課題として取り組む。

COCリサーチに対しては、全学教員を対象とする競争的研究資金（「地域志向」研究のための研究費補助制度）を新設し、積極的に支援する。

また、研究の成果発表のための補助もこれまで以上に充実させる。COCリサーチの具体的な候補案は、COCカリキュラムへの移行に伴う「地域志向」教育の効果検証に関する研究、地域住民のウェルネスに関する研究、地域資源のポテンシャルを活かして賑わいを創出する研究などを想定している。

さらに、地域志向の特徴が強い研究を全学的に推進していく。

## 【3. 社会貢献：コミュニティの再構築等の地域課題の克服に寄与する社会貢献活動の展開】

本事業では、対象地域の課題解決に寄与するウェルネス×協奏型地域社会の構築を目的とした社会貢

献活動を「COCタウンアカデミー」として位置づけ、以下の事業を全学的に展開する。

- ① 地域住民向けの公開講座・セミナー事業：本学の全教員が、学生を活用しながらデザイン学・看護学の最先端の講義を地域住民に対して行う「真駒内夜学校」の開講
- ② 多世代・多セクターの交流事業：地域住民の生活の質（QOL）を維持・向上できる仕組みとして、地域住民の相互学習の場「真駒内たまり場・しゃべり場」の開設と運営
- ③ 地域住民が主役となる生涯学習事業：専門知識を有する地域住民が講師となる「真駒内シニア・アカデミー」の開講
- ④ 幼・小・中・高大連携公開講座の運営：高校生以下の世代を対象とした公開講座や遊んで学べるワークショップの実施

なお、事業推進組織は本学の教職員が一体となって取り組む全学体制としている。さらに、本事業を円滑に進めていくため、札幌市の関係部課長、地域住民と大学が協議、情報交換を行う「COC連絡会議」を設置し、定期的に意見交換を行うこととし、札幌市と地域住民、本学の連携・協力を維持・強化していく体制としている。

# COC学内組織体制2013

全教職員の参加により推進

**COC推進会議**  
 議長：蓮見学長  
 メンバー：中村副学長、酒井デザイン学部長、樋之津看護学部長  
 城間デザイン研究科長、スーディ神崎地域連携研究センター長  
 中原附属図書館長、林事務局長

**事業評価部門**  
 副学長、推進会議選出委員、外部委員

- チームリーダー
- 代表幹事 (チームサブリーダー+班長)
- ◎ 幹事 (班長)
- メンバー

**学内委員会**

- ◇ 教務・学生連絡会議
  - ・ D教務委員会
  - ・ N教務委員会
  - ・ D学生支援委員会
  - ・ N学生支援委員会
- ◇ 地域連携研究センター
- ◇ 図書館運営会議
- ◇ FD委員会
- ◇ 広報委員会
- ◇ 倫理委員会
- ◇ 総務委員会
- ：
- ：
- ：

**事務局**

- ◇ 総務課
- ◇ 経営企画課
- ◇ 地域連携課
- ◇ 学生課
- ◇ 桑園担当課

**プロジェクトチーム**

- 西村 総務課長A
- 上田 地域連携課長A
- ◎ 藤崎 経営企画係長A
- 高橋 地域連携課員A
- 川村 総務課員A
- 佐藤(基) 総務課員A
- 三林 学生課員A
- 下村 桑園担当課員A
- 高橋 COC臨時職員
- 佐藤 COC臨時職員

**COC企画・推進グループ**

**幹事会**  
 事業担当者(責任者)：中原教授D  
 ● 酒井教授D ● 樋之津教授N  
 ● 中原教授D ● スディ神崎 教授N  
 ● 細谷教授D ● 内田教授N  
 ● 斉藤(雅)准教授D ● 吉川准教授N  
 ● 柿山准教授D ● 上田地域連携課長A  
 ● 西村 総務課長A ◎ 清水准教授N  
 ◎ 山田准教授D ◎ 守村准教授N  
 ◎ 杉本講師D ◎ 藤崎 経営企画係長A  
 ○ 藪谷 特任教員 ○ 特任教員(2014年度～)  
 (相談役 蓮見学長、林事務局長)

<p><b>教育改革企画推進チーム</b>                  「COCカリキュラム」の企画・推進</p> <p>● 樋之津教授N</p> <p>&lt;異分野連携科目の深化&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 齋藤(利)教授D ● 内田教授N</li> <li>○ 原教授D ○ 定廣教授N</li> <li>○ 町田准教授D ○ 山本(勝)教授N</li> <li>○ 山田准教授D ○ 山内講師N</li> <li>○ 柏倉助手N</li> </ul> <p>&lt;新設科目展開・地域科目の増強&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 細谷教授D ○ 河原田教授N</li> <li>○ 福田講師D ○ 菅原准教授N</li> <li>○ 石田講師D ○ 山本(真)講師N</li> <li>○ 星助手N</li> </ul> <p>○ 藪谷特任教員 / ○ 特任教員                  ○ 事務局プロジェクトチーム                  (窓口：三林学生課員、下村桑園担当課員)</p>	<p><b>研究企画推進チーム</b>                  「COCリサーチ」の企画・推進</p> <p>● スーディ神崎教授N</p> <p>&lt;研究基盤の整備・研究関連調査&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 石井教授D ○ 川村教授N</li> <li>○ 杉教授D ○ 村松准教授N</li> <li>◎ 山田准教授D ○ 神島講師N</li> <li>○ 檀山助教N</li> </ul> <p>&lt;ウェルネスサイエンス研究の推進&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 武邑教授D ● 吉川准教授N</li> <li>○ 矢部教授D ○ 貝谷准教授N</li> <li>○ 張准教授D ○ 渡邊講師N</li> <li>○ 御殿助手N</li> </ul> <p>○ 特任教員 (2014年度～)                  ○ 事務局プロジェクトチーム                  (窓口：高橋地域連携課員)</p>	<p><b>学び舎企画推進チーム</b>                  「COCアカデミー」の企画・推進</p> <p>● 酒井教授D</p> <p>&lt;真駒内夜学校&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 吉田(恵)教授D ○ 松浦教授N</li> <li>● 斉藤(雅)准教授D ○ 山田准教授N</li> <li>○ 松井講師D ○ 太田講師N</li> <li>○ 三谷講師D ○ 多賀助教N</li> </ul> <p>&lt;たまり場・しゃべり場&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 羽深教授D ◎ 清水准教授N</li> <li>○ 武田准教授D ○ 大野准教授N</li> <li>○ 片山講師D ○ 原講師N</li> <li>○ 小宮講師D ○ 藤井講師N</li> <li>○ 田仲助教N</li> </ul> <p>&lt;シニアアカデミー&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 石崎教授D ○ 坂倉教授N</li> <li>○ 上遠野教授D ○ 菊地准教授N</li> <li>○ 上田講師D ○ 坂東助教N</li> <li>◎ 杉本講師D ○ 横川助手N</li> </ul> <p>○ 藪谷特任教員                  ○ 事務局プロジェクトチーム                  (窓口：藤崎 経営企画係長)</p>	<p><b>広報企画推進チーム</b>                  COC事業の広報企画・推進</p> <p>● 中原教授D</p> <p>&lt;広報企画・制作・運営&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 柿山准教授D ○ 宮崎教授N</li> <li>○ 大淵講師D ○ 三上講師N</li> <li>○ 須之内助教D ○ 小田嶋助手N</li> </ul> <p>&lt;COC事業催事企画・運営&gt;班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 望月教授D ○ 猪股教授N</li> <li>○ 吉田(和)教授D ◎ 守村准教授N</li> <li>○ 金子助教D ○ 田中講師N</li> <li>○ 長谷川助教D ○ 工藤助教N</li> <li>○ 鈴木助手N</li> </ul> <p>○ 藪谷特任教員 / ○ 特任教員                  ○ 事務局プロジェクトチーム                  (窓口：高橋地域連携課員)</p>
---	--	--	---

## Ⅲ．活動報告

## 0. 活動履歴

### 2013年5月

- ・ 15日 COC 連携会議（札幌市役所市長会議室・札幌市長、学長等 25名）
- ・ 23日 文部科学省に申請書提出

### 7月

- ・ 17日 面接審査

### 8月

- ・ 2日 文部科学省より採択通知が届く

### 9月

- ・ 9日 COC 推進プロジェクトチーム会議
- ・ 18日 学内 FD / SD 研修会「地(知)の拠点整備事業について」(出席教職員 93名)
- \* 欠席者向けに 10月 16日に再度 FD 研修会を開催

### 10月

- ・ 2日 第1回 COC 推進会議（教員 8名・事務局 6名）
- ・ 11日 第1回 COC 幹事会（教員 9名・事務局 7名）
- ・ 15日 保養センター駒岡に関する説明会に学部連携演習担当・COC 幹事会メンバーが参加
- ・ 16日 各教授会で COC 学内組織体制を確認
- ・ 17日 旧緑小学校現地説明会
- ・ 21日 教育改革＜異分野連携科目の深化＞班 第1回班会議
- ・ 24日 教育改革＜新設科目展開・地域科目の増強＞班 第1回班会議
- ・ 24日 広報・第1回チーム会議
- ・ 30日 第2回 COC 幹事会（教員 13名・事務局 7名）

### 11月

- ・ 6日 第2回 COC 推進会議（教員 7名・事務局 8名）
- ・ 14日 研究・第1回チーム会議
- ・ 18日 学び舎＜たまり場・しゃべり場＞班 第1回班会議
- ・ 18日 研究＜研究基盤の整理・研究関連調査＞班 アンケート内容打合せ
- ・ 19日 学び舎＜真駒内夜学校／シニアアカデミー＞班 第1回班会議（合同）
- ・ 20日 南区連合町内会の研修会で中原 COC 事業担当者が COC 事業の説明
- ・ 26日 第3回 COC 幹事会（教員 14名・事務局 8名）
- ・ 26日 研究＜ウェルネスサイエンス研究推進＞班 打合せ
- ・ 26日 広報＜COC 事業催事企画・運営＞班 第1回班会議
- ・ 27日 教育改革＜異分野連携科目の深化＞班 第2回班会議

## 12月

- ・3日 教育改革<新設科目展開・地域科目の増強>班 第2回班会議
- ・4日 第3回COC推進会議(教員7名・事務局7名)
- ・5日 旧真駒内緑小学校見学会(教員8名・事務局7名)
- ・16日 研究<ウェルネスサイエンス研究の推進> 第1回班会議
- ・19日 学び舎<たまり場・しゃべり場>班 第2回班会議
- ・24日 学び舎<真駒内夜学校>班 第2回班会議
- ・25日 教育改革<異分野連携科目の深化>班 第3回班会議
- ・27日 第4回COC幹事会(教員14名・事務局8名)

## 2014年1月

- ・1日 COC 特任教員着任
- ・8日 第4回COC推進会議(教員8名・事務局8名)
- ・9日 第5回COC幹事会(教員13名・事務局8名)
- ・14日 学部連携演習発表会
- ・20日 学び舎<たまり場・しゃべり場>班 第3回班会議
- ・23日 ユニバーサルカフェ MINNA 視察
- ・24日 「廃校・旧校舎アートフォーラム～舞台制作と廃校～」にCOC事務局が参加
- ・25日 学び舎<シニアアカデミー>班 第2回班会議
- ・27日 教育改革<異分野連携科目の深化>班 第4回班会議
- ・28日 筑波大学「-病院のアートの芽」展シンポジウム参加(教員1名)
- ・30日 札幌市市民まちづくり局、子ども未来局と旧真駒内緑小学校校舎改修について打合せ
- ・31日 第6回COC幹事会(教員11名・事務局8名)
- ・31日 研究・第2回チーム会議
- ・31日 第1回COC連絡会議(札幌市役所市長会議室・31名(教職員10名))
- ・31日 南区在住65歳以上対象にCOCニーズ調査9,000通発送
- ・31日 COC-Webサイト開設

## 2月

- ・5日 第5回COC推進会議(教員7名・事務局6名)
- ・6日 学び舎<真駒内夜学校>班 第3回班会議
- ・6日 全学FD研修会「COCカリキュラムについて」
- ・10日 横浜国立大学 視察受入(1名)
- ・14日 学び舎<たまり場・しゃべり場>班 第4回班会議
- ・17日～18日 <たまり場・しゃべり場>班で東京・埼玉4施設を視察(教員4名)
- ・18日 東京「大学間連携共同教育推進事業選定取組全国シンポジウム」参加(教員1名)
- ・20日 COC 市民講座(企業・事業との交流事業・参加53名)
- ・21日 宮崎大学 視察受入(4名)
- ・26日 学び舎<たまり場・しゃべり場>班 第5回班会議
- ・27日 南区まちづくりセンター訪問(8地区)
- ・28日 学び舎<真駒内夜学校>班 第4回班会議
- ・28日 第7回COC幹事会(教員11名・事務局5名)
- ・28日 教育改革<異分野連携科目の深化>班 第5回班会議
- ・28日 地域防災を通じた協奏型社会の創造事業ミーティングに参加(教員5名)



## 3月

- ・ 1日 COC 共同研究費公募開始
- ・ 3日 全学FD ワークショップ「[学部連携演習]をデザインする」
- ・ 5日 第6回 COC 推進会議（教員7名 ・事務局8名）
- ・ 6日 学び舎<シニアアカデミー>班 第3回班会議
- ・ 8日 COC 公開フォーラム・南区いきいきプロジェクト展
- ・ 10日 「スタートアップ演習説明会」（簾舞・澄川・藤野地区）
- ・ 10日 次年度スタートアップ演習担当者会議
- ・ 10～11日 「北海道産学官プラットフォーム会議」及び北見市内視察（事務局1名）
- ・ 11日 「スタートアップ演習説明会」（藻岩下・芸術の森・真駒内地区）
- ・ 12日 「スタートアップ演習説明会」（定山溪・石山地区）
- ・ 14日 研究・第3回チーム会議
- ・ 16日 真駒内地区コミュニティカフェのイベント参加（教員1名）
- ・ 17日 「スタートアップ演習説明会」（藻岩・南沢地区）
- ・ 18日 富山県立大学 視察受入（3名）
- ・ 18日 学び舎<たまり場・しゃべり場>班 コミュニティカフェグループ会議
- ・ 23日 神戸市看護大学「COC キックオフシンポジウム」参加（教員2名）
- ・ 24日 COC 市民講座「地域の人々と学生が共に学び合う“学び舎”について」
- ・ 27～28日 東京・埼玉2施設を視察（教員1名）
- ・ 29日 東京「全国廃校フォーラム2014（第三回）」参加（教員1名）
- ・ 31日 第8回 COC 幹事会



## 1.1 教育改革企画推進チーム「異分野連携科目の深化」班

チームリーダー：樋之津淳子

代表幹事：内田雅子

メンバー：斎藤利明・定廣和香子・原俊彦・山本勝則・町田佳世子・山内まゆみ・柏倉大作

### I 本班の平成 25 年度の事業概要・目的

地域志向のカリキュラム改革の第一段階として、「学部連携演習」においてデザイン学部と看護学部の学生がともに札幌市南区を題材とした地域課題に関する学修を実施する。また、異分野連携教育の「スタートアップ演習」、「学部連携演習」における評価基準を改善する。

### II 本班の平成 25 年度の役割

3 年次後期に開講する「学部連携演習」において、札幌市、特に南区を題材とする地域課題を体感し、それぞれの知識・技能・技術を活用して課題に取り組めるような演習プログラムを設定する。平成 26 年度の「スタートアップ演習」、「学部連携演習」に向けてアウトカム評価の方法を検討する。

### III 平成 25 年度の活動

#### 1 事業計画

##### 1) 平成 25 年度「学部連携演習」における演習内容の変更

3 年次後期の「学部連携演習」では、本事業の対象地域である札幌市南区の課題に取り組むため、学生が 10 チーム程度に分かれて実地視察、フィールドワークを実施する。

##### 2) 異分野連携教育における演習内容ならびに評価方法の検討

平成 26 年度の「スタートアップ演習」、「学部連携演習」について、デザイン学部と看護学部の学生が異分野連携を通じて地域の課題に取り組むことができるような演習内容を検討するとともに、演習成果のアウトカム評価の手法等について検討を行う。

#### 2 主な活動

##### 1) 平成 25 年度「学部連携演習」の実際と課題整理

平成 25 年度「学部連携演習」は、総合テーマを「南区いきいきプロジェクト」とし、札幌市南区の地域において自分たちにどのような貢献ができるのかを、バスを利用した見学・調査を通して真摯に検

討し有意義な提案を行った。

	チーム名	発表タイトル
①	おれもおまえも族	ねんりん広場 退職後のいきいき空間の提案
②	やまちゃんファミリー	オリンピック施設の再生 ～真駒内セキスイハイムアイスアリーナを南区のランドマークへ～
③	チーム芸鉄	芸鉄 ～南区に“芸術の森鉄道”を通す
④	ひげちゃびん	まこまない 遊歩林道
⑤	D×N pic (ディンピック)	南区きんりんピック ～地域スポーツ大会による真駒内地区活性化～
⑥	サウ酢ビネガーズ	みなみの畑 ～南区の農作物のブランド化～
⑦	今日は私の誕生日	終活講座「Never ending story」～
⑧	右手に剣を左手に剣を 一攻めの汗だくく連携一	石山商店街いきいきプロジェクト ターゲット別マップ付きエコバッグの提案
⑨	チームからあげ	定山溪さんぽ未知との遭遇 観光客および地元の人たちの健康増進・定山溪の魅力を発見/再発見を促す企画
⑩	C L S ～官能と理性のか つてない融合	みなみらくる<移動式イベント>

- ・ 10 チーム全てが、バスを利用した見学・調査（2 回）を実施した。札幌市南区における現状と課題の掘り起こしを行い、ユニークな提案に結実させていた。対象地域を札幌市南区に限定したことが、課題の絞り込みを容易にさせた。
- ・ COC 対応授業として急遽決まったため、事前に決定していた 10 日間の授業日数に対し、2 回のバスを利用した見学・調査が重く、授業運営が厳しかった。学生による<授業アンケート>にも 2 回のバス利用が重く、議論をする時間が足りなかったという意見が多く見られた。来年度は、バス利用による見学・調査を有効に活用できるよう、他の交通機関を含めた運用の仕方・利用回数等を検討する必要がある。

##### 2) 平成 26 年度「スタートアップ演習」の演習内容

平成 18 年度から平成 25 年度までの「スタートアップ演習」の実績を踏まえつつ、より地域に密着した、身近なテーマを発見し 4 年間の学習のスタートとすることを考え、演習内容の更新を計画した。まず、従来の基本テーマの「デザインと看護の連携」に地域貢献を加え、いかにして地域貢献するか、そのために「デザインと看護の連携」を通じて何ができる

かを考える内容とした。このため、従来演習の、漠然とした「プロジェクト案の提案」という形ではなく、自分たちで地域の課題を発見し、具体的な活動を行い、その結果を報告するという「ミッション方式」を採用する。

このため10チームを各担当地区（南区の10連合町内会）とまちづくりセンター9ヶ所（藻岩のみ2町内会）に割り振り、地域を実際に訪問して、地域の方々と交流し、そこから地域の課題を発見、「デザインと看護の連携」を活かした、地域への貢献活動を実施する計画である。具体的には、従来のオリエンテーション、導入教育的活動に引き続き、第4回目、各チームに分かれて9ヶ所のまちづくりセンターを訪問する。

まちづくりセンターを中心に、作業分担して、町内会（地域住民）との懇談、地域の見学視察などを行う。また中間報告前あるいは中間報告後にチームごとに日時を調整し、もう一度、地域に入る（可能であれば、具体的な活動を行う）。学内報告は、例年どおり、スカイウェイでの展示、最終報告会を行うが、最終報告会には、地域の方々にも参加してもらい、その評価を学生にフィードバックする（成績への反映方法については次年度以降に検討）。また将来的には大学祭での展示・報告会の開催（まちづくりセンターに案内状、プログラムなどを配布し、地域住民を対象に報告会を行うことも検討している。）学生のアウトカムの評価方法についても次年度以降に検討する予定である。

### 3) 平成26年度「学部連携演習」の演習内容

平成26年度の学部連携演習は、授業日程を見直し、看護学部の実習終了後、12月第2週を日程として確保し、後期ガイダンス後に第1回が実施できるように計画している。また、中間評価の実施など、具体的な方法をシラバスに明記した。バスの利用方

法は、日程や回数など柔軟に企画できるように検討予定である。一回の授業時間が長く、疲労が強くなりやすいため、作業が多くなる時期に時間配分を多くするなどスケジュール配分のモデルケースなどを提示し、円滑に授業計画が立案できるよう支援する。具体的には、授業時間を14時から18時とし、残る授業時間を土曜日にバスを利用したフィールド調査に当てることなどを提案する予定である。

### 4) 平成26年度の連携教育におけるアウトカム評価手法の検討

連携教育におけるアウトカム評価に向けて、「学部連携演習」の『個人活動評価票』について検討した。平成25年度「学部連携演習」より、学生の自己評価ツールとして『個人活動評価票』が導入された。これは学生が中間と最終の2回に分けて記載するワークシートである。

『個人活動評価票』の評価項目は、①出欠状況、②シラバスに提示している3つの到達目標を具体化した20項目の下位目標（評価基準）から構成されている。20項目に沿った自己評価は、i) 14項目について〔達成できた：○〕の2肢選択法で記入し、ii) 6項目についてはa) デザインと看護の共通性、b) デザインと看護の相違性、c) デザインと看護が連携するための課題、d) 連携するための課題克服に向け努力した事、e) 連携の成果(意義)、f) 学生間相互評価、に関する自由記述によって行う。

平成25年度の受講生が提出した『個人活動評価票』を概観したところ、学生個々の学習プロセスや成果に対する認識が具体的に表われており、分析に十分耐えうる資料であることが確認された。次年度より、この『個人活動評価票』をアウトカム指標とするための具体的な分析・評価の手法を検討する予定である。



### 3 評価

#### 1) 平成 25 年度「学部連携演習」について

- ・連携教育におけるアウトカム評価を、今年度の「学部連携演習」に初めて導入した。学生への〈授業アンケート〉は、「今年の評価方法を来年も継続してほしい。」「グループメンバーからの評価は必要」など導入に対して賛同する意見が多く見られた。
- ・学生が提出した「個人活動評価票」は自身に対する評価基準にバラツキがあった。特に頑張っていたと思う学生の自己評価が悪いなどの事例も見られることから、運用方法に関しては検討すべきである。
- ・「グループメンバーからの評価」も 2 回目回収の評価票では、授業全体での評価ではなく、最終のまとめ作業（プレゼン資料制作や模型制作等）を分担して行ったメンバー（2・3 人）同士の評価になっている可能性もあり、改善が必要である。

#### 2) 平成 26 年度「スタートアップ演習」の演習内容について

実施計画としては、地域課題の発見に繋がる第一歩を踏み出すことができると考えている。

#### 3) 平成 26 年度「学部連携演習」の演習内容について

教務学生連絡会議を中心に、平成 25 年度の実施結果に基づき、責任者を明確にして、改善案の作成に取り組んだ。そのため、課題となったバスの利用方法や日程について、具体的な改善策を盛り込めたと評価している。

#### 4) 連携教育のアウトカム評価について

連携教育におけるアウトカム評価は、主に学生の自己評価資料を活用する案が検討された。今年度「学部連携演習」で用いた『個人活動評価票』は、量的・質的分析により 3 年生に期待される「課題発見力」、「協調性+企画力」、「交渉力+コミュニケーション力」の自己評価が可能である。1 年生の「スタートアップ演習」は、この『個人活動評価票』を「課題発見力」に焦点化し項目を絞るなど学修レベルにあわせた改変が必要である。

### IV 今後の課題

#### 1) 「スタートアップ演習」、「学部連携演習」の演習内容について

「スタートアップ演習」については、学生自身の自己評価、学生同士の他者評価、学生の成績評価、演習全体の評価（特に地域貢献という点）などの方法を検討して行く必要がある。また新しい方式を実際に実施することで、演習の運用上の問題（教員間の連携、地域との連携など）、多くの課題が出てくるものと思われる。

#### 2) 連携教育のアウトカム評価について

連携教育のアウトカム評価基準の改善において、今後はさらに、学生の自己評価とチームメンバーによる他己評価、ならびに実社会で通用するか否かの地域住民の参加によるアウトカム評価についても検討する必要がある。また、『個人活動評価票』を用いた分析と評価にはそれ相当の時間を有するため、誰がいつどのように分析し評価に用いるかという具体的プロセスについても教員間でさらに検討していく必要がある。

## 1.2 教育改革企画推進チーム「新設科目展開・地域科目の増強」班

チームリーダー：樋之津淳子

代表幹事：細谷多聞

メンバー：福田大年・石田勝也・河原田まり子・菅原美樹・山本真由美・星幸江

### I 本班の平成 25 年度の事業概要・目的

本班は、COC カリキュラムの編成を目指し、「地域志向科目の増強に向けた検討」と「地域志向科目のシラバスへの反映」の2点を目的として、活動を行っている。特に本年度は、「地域志向科目のシラバスへの反映」について具体的な計画を練り、本学の来年度シラバスへの記載調整を行なった。

### II 本班の平成 25 年度の役割

COC 事業の最大の目的は教育改革にある。本班は、このことを踏まえ、本学が行なっている現状の教育内容から、地域志向科目として表明できるものを抽出する作業を担った。具体的には、本学教員が来年度に向けて作成するシラバス（授業計画書）の内容を吟味し、「地域志向」をどのように定義づけるかについて検討を行ない、それらをシラバスに反映させる作業を行なった。

### III 平成 25 年度の活動

#### 1 事業計画

地域志向科目のシラバスへの反映を行なう。

#### 2 主な活動

班での検討を踏まえ、平成 25 年 12 月の教員会議にて、全教員に対し、「地域志向科目」として適切な内容を有する授業であれば、COC マークを付し

てシラバスに記載するよう、ガイダンスを行なった。また、このガイダンスを受け、複数の教員から「地域志向科目」の定義について質問があり、合意形成のために全学 FD 研修会「COC カリキュラム」を平成 26 年 2 月 6 日に実施し、合意形成を試みた。

### 3 評価

上記に挙げた活動は、「地域志向科目」の定義を行なう上で最終的な合意に至らず、COC マークをシラバスに記載することは叶わなかった。しかしながら、これらの定義を平成 26 年度事業で明確化することにより、教育効果の高いシラバスへの反映が実現することを全教員で確認することができた。また、各々の教員が自身の授業を振り返り、「地域志向科目」としての位置づけを確認するとともに、その内容をシラバスへの記載事項として反映することができた。

### IV 今後の課題

平成 26 年度の事業計画として、複数回の全学 FD を主催しながら、「地域志向科目」の定義を明確化することが課題である。また、この定義にもとづいて、明確に「地域志向科目」と記すことのできるシラバスづくり、COC カリキュラムづくりに発展させる。

## 2. 研究企画推進チーム

チームリーダー：スーディ神崎和代

研究企画推進チームは「ウェルネスサイエンス研究推進班」「研究基盤の整備・研究関連調査班」の2班で構成されているが、平成25年度は短期間でCOC研究の基盤整備を行う必要があったため、両班で協働作業体制をとり早急に活動を開始した。

COC研究費の公募要領案を作成後、公募要領についての承認を文部科学省から得るプロセスと南区在住の高齢者ニーズ調査実施（9000名）に伴う準備（南区との協議・合意形成、倫理審査申請・承認、調査項目と妥当性の検討・選択、採用予定の調査用ツールの著作者からの使用許諾確認、データ入力業者選定等）のプロセスを同時並行で進めた。平成26

年2月末時点では、COC研究費公募についての全教員を対象とした説明会、及びHPへの掲載を終了し、3月1日公募開始の最終準備をしている。一方、南区在住の高齢者を対象とした調査は回収（約30%の回収率）を終了し、データ入力要領を業者と確認中である。

今後は班メンバーによるデータ分析・考察、他班の調査結果活用促進、調査結果の公表、COC研究応募申請書の厳正かつ公平な審査・決定、採択後の研究者への支援体制の整備などを目標に活動をしていく予定である。

### 2.1 研究企画推進チーム「研究基盤の整備・研究関連調査」班

チームリーダー：スーディ神崎和代

幹事：山田良

メンバー：石井雅博・杉哲夫・川村三希子・村松真澄・神島滋子・檜山明子

#### I 本班の平成25年度の事業概要・目的

COC事業の効果・評価に関する研究の基礎データ収集を目的として、対象地域（札幌市南区）の高齢者のニーズ調査を行う。

#### II 本班の平成25年度の役割

南区役所との協議・倫理審査申請と発送準備・高齢者ニーズ調査用紙発送・調査用紙回収とデータ入力。

#### III 平成25年度の活動

##### 1 事業計画

COC事業の基礎データ収集のため、対象地域（札幌市南区）の高齢者のニーズ調査を行う。

##### 2 主な活動

- 1) 高齢者ニーズ調査用紙発送に向け、南区役所との協議・調整を行った。

- 2) 研究倫理委員会へ倫理審査申請を行い、承認された。
- 3) 高齢者ニーズ調査用紙を発送した（9000部）。
- 4) 高齢者ニーズ調査用紙を回収した（3月3日時点約30%回収率）。

#### 3 評価

今年度の事業計画通りに事業を遂行することができた。

#### IV 今後の課題

- ・回収した高齢者ニーズ調査用紙の分析を行う。
- ・次年度に向けた目的・役割を明確にする。

## 2.2 研究企画推進チーム「ウェルネスサイエンス研究の推進」班

チームリーダー：スーディ 神崎和代

代表幹事：吉川由希子

メンバー：武邑光裕・矢部和夫・張浦華・貝谷敏子・渡邊由加利・御厩美登里

### I 本班の平成 25 年度の事業概要・目的

地域課題の解決に寄与し、ウェルネス×協奏型地域社会の構築を目的とした研究を平成 26 年度から学内募集するため、募集要項、募集方法などに関する検討を行う。

### II 本班の平成 25 年度の役割

「COC リサーチ共同研究費」の募集要項および募集方法を検討し、学内周知を行うこと。

### III 平成 25 年度の活動

#### 1 事業計画

平成 26 年度から新設する学内共同研究費による地域志向研究「COC リサーチ」の募集準備を行う。

#### 2 主な活動

- 1) 既にある学内の競争的研究費補助制度の要項および申請書を参考に「COC リサーチ共同研究費」の平成 26 年度用の要項および申請書を作成した。
- 2) 審査委員会については、COC 事業担当者を委員長とし、構成メンバーを COC 企画・推進グループの代表幹事（教員）9 名、オブザーバー参加として事務局代表幹事 2 名とし、COC 推

進会議で承認された。

- 3) 作成した書類を平成 26 年 1 月に文部科学省に提出、指摘箇所を修正し再提出し 2 月 13 日に承認された。
- 4) 平成 26 年 2 月 20 日のデザイン学部・看護学部の各教授会・教員会議で「COC リサーチ共同研究費」について説明を行い、募集を開始した。
- 5) 平成 26 年 3 月 31 日で募集を締め切り、4 月以降、新任教員の募集終了後に審査を開始する予定である。
- 6) 4 月赴任予定教員には、4 月以降に 2 週間の期限を設け募集する予定である。

#### 3 評価

今年度の事業計画通りに事業を円滑に遂行することができた。

#### IV 今後の課題

- ・募集への積極的な呼びかけを行う。
- ・配分された研究費が適正に運用され、この事業の目的に沿った成果が公表されているかを確認していく。

**COC 共同研究費について**  
-2014 年度-

**1. 概要**

COC リサーチ共同研究費とは、対象地域の課題解決に寄与する、ウェルネス×協奏型地域社会の構築および大学カリキュラムへの反映を目的とした研究を奨励するために配分する、全学を対象とした競争的研究資金制度である。そのため、全ての研究成果は、教育及び地域貢献に資することを原則とする。対象研究はテーマに沿った単年度計画または2年計画の研究とする。また、この資金の配分は事業期間である2014年から2017年度までとする。

**2. 予算額**

- 500万円
- ※採択件数の上限を5件とする
- ※1件当たりの研究費の上限を100万円とする。
- ※継続研究の予算は単年度ごとの申請とする。

**3. 審査委員会**

審査委員会の構成は以下のとおりとし、COC 事業担当責任者を委員長とする。  
構成メンバーは COC 企画・推進グループの幹事代表幹事（教員）9名とし、オブザーバー参加として事務局の代表幹事2名を置く。  
※審査委員会の構成員が応募、または共同研究者となる場合は、当該審査には加わらないこととする。

**4. 実施要領**

① 研究組織について

- ・研究組織は学内教員（常勤）で構成され、学外者は組織構成員にはならない。  
※地域住民や行政担当者についても学外者とみなす。
- ・大学院生・学生はアルバイトとしての雇用は認めるが、研究組織構成員にはならない。
- ・共同研究者には、申請書提出前に研究計画書の写しを渡し、同意を得ていることを条件とする。

② 応募期間

2014年3月31日（月）まで

③ テーマ

COC 事業対象地域におけるウェルネスに関連し、本学の教育に反映が期待できるもの

④ 研究期間

単年度または2ヶ年とする。2ヶ年の研究計画が採択された場合であっても、2年目の採択を保障するものではない。また、継続研究の場合、当該研究は事業年度内に完了させる必要があることから、研究期間の最終年度は2017年度とする。

⑤ 審査方法

- ・審査は一般審査から成る。

- ・採択課題は審査項目ごとの平均点を算出し、加点方式（60点満点）による評点及び総合評価により審査委員会が選定し、学長の承認をもって決定する。審査委員会の協議の中で、応募課題が採択に値しないと判断した場合は、当該年度の採択をなしとする場合もある。
- ・科研費等、学外の助成制度から、既に受領している又は受領することが決定している補助金と、同一とみられる内容・テーマの研究計画によって、当該補助事業へ申請することは認めない。同様に、学術奨励研究(特別研究)・共同研究・田村ICT基金において、同一とみられる内容・テーマの研究計画の重複採択は認めない。また、同一とみられる内容・テーマの研究計画で学内外の複数の助成制度へ同時に応募することは可能。ただし、複数件採択された場合は、受領する補助金の一つを選択し、それ以外の補助金は辞退すること。
- ・同一研究者が研究代表者として複数課題を応募することは認めない。
- ・配分額は適切に積算された研究計画書に基づき、審査委員会が決定する。研究計画との関連が薄い海外出張、恒常的な研究費にて整備すべき物品については、原則、認めない。また、経費の計上が適切ではないと判断される場合には、経費積算の見直しを含む研究計画書の修正を求めることがある。所定の期間内に研究計画書の修正版が提出されない場合は辞退とみなし、不採択とする。

⑥ 審査基準

審査項目	評点	備 考
研究の連携性	A~E	共同研究者および学外連携者との連携や役割は明確であり、組織の必然性、連携の効果が見られるか。
研究目的の明瞭性	A~E	研究の必要性が COC 事業のテーマに沿っており、具体的に明確か
研究内容の独創性	A~E	COC 事業としての特色、独創性が明確か
研究結果の進展性	A~E	COC 事業に伴う地域活性化への貢献が期待できるか 研究結果が支援を受けた教員の教育内容に反映させることが期待できるか
研究計画の妥当性	A~E	研究計画と方法の妥当性ならびに経費規模および支出計画の適切性はあるか

※「研究目的の明瞭性」「研究内容の独創性」「研究結果の進展性」「研究計画の妥当性」については審査員の平均点にて評価する。

評点 A~E は、右の表に基づいて点数化する。

評点	点数
A	10
B	7
C	5
D	3
E	1

⑦ 採択結果の通知および公表

審査経過の透明性を担保するために、採択結果は本人に通知する。その際には、審査委員会からのコメント、総合評点と審査項目毎の評点を通知する。  
また、採択研究課題の課題名、研究代表者名を公表する。

⑧ 採択後の経費執行

経費の執行は、学内研究費と同様、物品請求システム等により申請し、契約・決済業務は事務局が行う。また、執行のルールは本学の「研究執行の手引き」に準ずることとする。

⑨ 採択後の義務

採択された研究は（1）～（4）についての義務を担う。

- (1) COC 事業報告書に年度単位で実施経過または結果を報告しなければならない。報告書は別途様式にて、速やかに提出しなければならない。報告書、必要書類等が提出されていない場合、次年度の新規申請は受け付けない。
- (2) 研究成果は SCU 産学官研究交流会や公開講座、そのほか地域を対象とした公開の場でその成果を公表しなければならない。
- (3) 研究成果は地域が発刊している紙面や本学研究論文集、学会発表、学術誌などで報告し、その成果を公表しなければならない。
- (4) 研究成果発表の際に、本研究費による助成を受けたことを明示する場合は、次の記載例を参照すること。  
<和文>本研究は、札幌市立大学 COC 共同研究費の助成を受けたものです。  
<英文> This study is funded by MEXT (COC project).

⑩ スケジュール

月	日	内 容
2014年2月	20日	説明会開催
2月	24日	公募開始
3月	31日	応募締切
5月	上旬	採択結果通知
5月	中旬	COC 共同研究：研究費執行開始
2015年1月	末日	COC 共同研究：研究費執行締め
2月	末日	COC 共同研究：年度の研究期間終了
3月	中旬	COC 共同研究：報告書などの書類提出締め切り

### 3. 学び舎企画推進チーム

チームリーダー：酒井正幸

代表幹事：齊藤雅也（真駒内夜学校班 班長）

幹事：清水光子（たまり場・しゃべり場班 班長）

幹事：杉本達應（シニアアカデミー班 班長）

※チーム、班の構成は以下に記載。

#### I 本チームの平成 25 年度の事業概要・目的

学び舎企画推進チームは、1)「真駒内夜学校」班、2)「真駒内たまり場・しゃべり場」班、3)「真駒内アカデミー」班の3班で構成され、本事業の対象地域の札幌市南区において、多世代・多セクターで構成される地域住民のウェルネス向上とまちづくりに関わる社会貢献を推進する役割を担う。

事業の開始年度にあたる平成 25 年度は、次年度以降に3つの班が展開する企画内容の立案・検討などを行なう準備期間と位置づけ、企画の一部を試験運用する期間として、本事業を推進するための基盤づくりを目指す。

#### II 本チームの平成 25 年度の役割

教育企画推進チーム、研究企画推進チーム、広報企画推進チーム、事務局と連携して、本事業の社会貢献に関わる事業の企画立案を進める。本チームの3つの班（／以降は、構成員を表わす（敬称略））の役割を以下に示す（D はデザイン学部、N は看護学部を表わす）。

- 1) 真駒内夜学校班／D：齊藤雅也・吉田恵介・松井美穂・三谷篤史、N：松浦和代・山田典子・太田晴美・多賀昌江  
・真駒内夜学校の準備／D：松井美穂・三谷篤史、N：山田典子・太田晴美・多賀昌江  
・公開講座・セミナー等の開催／D：齊藤雅也、N：松浦和代・山田典子  
・企業・事業所等との交流事業の実施／D：齊藤雅也・吉田恵介、N：松浦和代
- 2) たまり場・しゃべり場班／D：羽深久夫・武田亘明・片山めぐみ・小宮加容子、N：清水光子・大野夏代・原井美佳・藤井瑞恵・田仲里江  
・コミュニティカフェ・市民交流の準備／D：武田亘明・片山めぐみ、N：清水光子・大野夏代・原井美佳・田仲里江  
・防災事業の準備／D：羽深久夫・小宮加容子、N：藤井瑞恵

- 3) シニアアカデミー班／D：杉本達應・石崎友紀・上遠野敏・上田裕文、N：坂倉恵美子・菊地ひろみ・坂東奈穂美・横川亜希子  
・講師人材の発掘／未定  
・参加者ニーズ分析、イベント企画／未定

#### III 平成 25 年度の活動

##### 1 事業計画

###### 1) 真駒内夜学校班

- ・平成 26 年度から開講予定の「真駒内夜学校」の準備を行なう。
- ・ウェルネス×協奏型地域社会の構築に向けた公開講座・セミナー等をサテライトキャンパスで開催する。
- ・ウェルネスに関わる企業等の事業所や北海道立総合研究機構との交流事業を実施し本事業の準備を行なう。

###### 2) たまり場・しゃべり場班

- ・多世代・多セクターによる協奏の場づくりの先進事例として、フューチャーセンター等の運営状況等について視察を実施する。
- ・コミュニティカフェ組織との連絡調整を行う
- ・平成 27 年度から開講する「たまり場・しゃべり場」の準備を行なう。

###### 3) シニアアカデミー班

- ・平成 27 年度から開講する「シニアアカデミー」の準備と講師の人材発掘を行なう。
- ・「関係医療機関との連携や看護の高大連携」を実施する。

##### 2 主な活動

###### 1) 真駒内夜学校班

班会議を10月、12月、1月、2月に4回実施し、役割分担をして以下の項目を実施した。

###### ◆平成 26 年度から開講予定の「真駒内夜学校」の企画準備

メンバー全員で次年度から開講予定の「真駒内夜

学校」の企画内容を検討した。具体的には、学び舎企画推進チーム全体での企画内容を検討するマトリクス表を作成した。それに基づいて、各企画の名称（真駒内夜学校等の名称）についての検討を開始した。企画内容については、本学教員が主体として進める講座、外部講師を招聘する講座の構成案について検討した。

#### ◆大学院デザイン研究科「ソシオデザイン特論」の授業公開の準備

次年度に開講する当該授業の市民公開のための準備を行なった。次年度の初めに、札幌市南区民センターを会場にして大学院授業の市民公開の方法を具体化し、1月31日に札幌市長の参加を得て実施した「第1回COC連絡会議」で公表するとともに、札幌市の広報誌「広報さっぽろ」等により広報活動を行なった。

#### ◆COC市民講座「地球環境時代の住まいを考える」の実施

ウェルネス×協奏型地域社会の構築に向けたCOC市民講座を、2月20日に北海道立総合研究機構との共催でサテライトキャンパスにて実施した。本事業の概要説明とともに、北海道における住まいの熱性能、省エネルギー性、健康(ウェルネス)、快適性との関係について、道内外から53名の参加者を得て実施し、盛会に終了した。

#### ◆COC市民講座「SCUまちな学校」の実施

本事業を市民向けに紹介する企画として、COC市民講座を、3月24日に本学サテライトキャンパスにて実施した。本事業は本学教職員のFD研修会を兼ねる企画案とした。

## 2) たまり場・しゃべり場班

#### ◆多世代・多セクターによる協奏の場づくりの先進事例の視察

以下の先進事例の視察を行った。

「ユニバーサルカフェMINNA」「廃校・旧校舎アートフォーラム～舞台制作と廃坑～（あけぼのアート&コミュニティセンター）」「取手アートプロジェクト」「アーツ千代田3331」「アークスプロジェクト」「芝の家」

#### ◆コミュニティカフェ組織との連絡調整

札幌市市民まちづくり局、子ども未来局と施設設備の改修に向けて、打ち合わせを行った。

#### ◆平成25年度公開フォーラムの第二部の企画・運営

平成26年3月8日の公開フォーラムに併せて、

学生のパネル展示による市民の皆様との交流の場を設定し、ワークショップを行った。交流の場で教員から本事業の説明を行い、参加された市民からまちづくりや本事業に対する要望などを伺い今後の計画の参考とすることとした。

#### ◆地域防災事業の企画・運営についての準備

以下の活動に参加した。

「第2回宿泊型避難所体験（里塚・美しが丘地区センター平成25年度事業）」「平成25年度多文化共生ワークショップ～多文化防災を考える～」

今後の活動に向けて、地域防災を通じた協奏型社会の創造キックオフミーティングを開催した。参加メンバーは、札幌市立大学、札幌市南区市民部総務企画課、北海道総務部危機対策局危機対策課、北海道コカ・コーラボトリング株式会社、KDDI株式会社、日糧製パン株式会社。

## 3) シニアアカデミー班

班会議を10月、1月、3月（予定）に3回実施し、イベント開催検討ワーキンググループを1月に1回実施し、以下の項目を実施した。

#### ◆平成27年度から開講予定の「シニアアカデミー」の企画準備

シニアアカデミーのコンセプトをメンバー間で共有し、講師人材発掘に向けての準備を行なった。平成26年度にシニアアカデミーのイベントの開催を検討した。

#### ◆桑園キャンパスでの「関係医療機関との連携や看護の高大連携」

看護学部において従来どおり実施した。

## 3 評価

### 1) 真駒内夜学校班

事業計画に挙げられている3つの項目全てを完了するとともに、次年度への基盤を構築した。よって、



本年度の目的は達成したと言える。具体的には、本学と連携協定を結んでいる北海道立総合研究機構との共催による交流事業（2月20日：COC市民講座）の実施により、ウェルネス（特に住宅における熱的快適性と省エネ性の関係）の重要性について広く認知される機会になるとともに、本学および同研究機構の知見を地域の住民、専門家、企業等に広く還元することができた。また、次年度はじめに開講する大学院デザイン研究科「ソシオデザイン特論」の市民公開準備を完了した。

## 2) たまり場・しゃべり場班

平成25年度の目標は、ほぼ達成することができた。平成27年度から実施する「たまり場・しゃべり場」の準備についても積極的に取り組むことができた。

先進事例の視察から、施設設備に関すること、事業の運営、地域との関係性、継続のための方法など数多くの示唆を得ることができた。コミュニティカフェについては、札幌市と連携して進めていくことが確認できたが、具体的な事業内容は次年度に持ち越しとなった。

初めてのCOCフォーラムに、大学（学生・教員等）、札幌市、市民が集える場を設定したことは意義深く、今後の「ウェルネス×協奏型地域社会の構築」への足掛かりになると考える。また市民との協働事業として提案した「地域防災事業」は、南区市民部総務企画課や各企業（北海道コカコーラボトリング株式会社、日糧製パン株式会社、KDDI）の参加を得て、南区（北海道札幌市）の防災について考えていく見通しが立っている。

## 3) シニアアカデミー班

事業計画の項目を実施し、本年度の目的は達成した。

## IV 今後の課題

### 1) 真駒内夜学校班

引き続き、「真駒内夜学校」の企画立案を進め、年間計画を作成するとともに、次年度に実施可能な

企画については、順次、円滑に実施するための準備を行なう。

また、本学の開学以来実施してきた、地域連携研究センター主催の市民公開講座・セミナー（原則、サテライトキャンパスにて実施する企画）の実施方法を参考にして、募集方法、運用方法、謝金等の規定を整備していくこととする。

## 2) たまり場・しゃべり場班

引き続き、「たまり場・しゃべり場」の企画立案を進め、年間計画を作成する。その際、具体的な企画内容について、準備段階から地域住民や企業の意見や要望を組み込めるような仕組みを構築していく。さらに運営方法や地域との関係性についても先進事例を参考にして準備を行なう。

## 3) シニアアカデミー班

引き続き、「シニアアカデミー」の企画立案と実施に向けた具体的準備を行なう。講師人材の発掘、登録や運用方法を整備していくこととする。

## V その他

平成25年度は、学び舎企画推進チームとして、以上の3つの班による構成で活動をしてきたが、地域住民向けの呼称・愛称として「真駒内夜学校」、「たまり場・しゃべり場」、「シニアアカデミー」は、実施時期（夜）や人材（シニア世代）など、事業対象が限定的な表現になっていることが、班会議などの場がかねてから指摘された。そこで、次年度以降は、3つの班の呼称を以下のとおり変更して事業を進めることとした。

学び舎の全体の呼称：（ ）内は旧呼称。

SCUは、Sapporo City Universityを表わす。

SCU まちの学校（COCタウンアカデミー）

-SCU まちの教室（真駒内夜学校）

-SCU まちの談話室（たまり場・しゃべり場）

-SCU まちの先生（シニアアカデミー）

## 4.1 広報企画推進チーム「広報企画・制作・運営」班

チームリーダー：中原宏

代表幹事：柿山浩一郎

メンバー：大淵一博・須之内元洋・宮崎みち子・三上智子・小田嶋裕輝

### I 本班の平成 25 年度の事業概要・目的

本班は、「教育改革企画推進チーム」「研究企画推進チーム」「学び舎企画推進チーム」が推進する事業を、地域・社会へ繋げる支援を目的とした班である。主に、他チームの活動の記録、成果の社会への発信を目的とする。

### II 本班の平成 25 年度の役割

平成 25 年度は、本事業スタートの年であり、記録広報のあり方の検討と具体的な運用方法の検討、平成 25 年度の本事業の活動の実際の記録、広報（情報発信）を行う。具体的には、本事業で行うワークショップ、授業、会議及びシンポジウム等の様々な活動を映像で記録し、今後の教材として活用すると

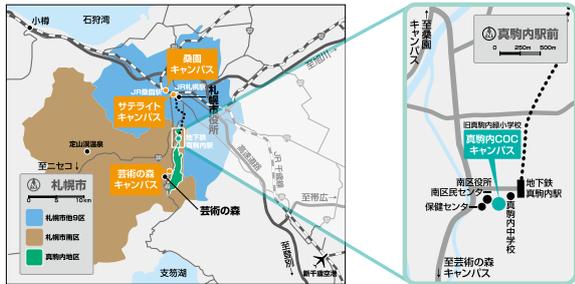
ともに、本 COC 事業の成果を広く社会に広報するための資料としても活用するため、撮影・取材にかかる業務を外部業者に発注、依頼する。

また、本事業の活動を広く PR することを目的に、ホームページを立ち上げる。なお、このホームページでは、本事業を構成する各班が、自立的に情報発信できる仕組みを構築することを目指す。

さらに、地（知）の拠点（Center of Community）を志向する他大学の視察及び情報交換の促進を行う。

#### ■本事業の実施場

包括地域として「札幌市全域」、集中地域として「札幌市南区」を設定し、地域との活動を行います。



#### ■COCキャンパスを平成27年に開設予定

平成24年に閉校した旧真駒内緑小学校の一部教室の提供を札幌市から受け、COCキャンパス(学び舎)を新設します。平成25・26年度は、南区施設で活動します。



#### ■本事業の推進体制

地域のひととの対話がしやすい、連携のかたちを創り本事業に取り組みます。



#### ■「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」とは？

自治体と連携し全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学。文部科学省が支援する事業です。平成26年度に、全国52大学が選ばれました。課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる「地域コミュニティ」の中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としています。

※COC = Center of Community

文部科学省「平成25年度採択「地(知)の拠点整備事業」ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科  
芸術の森キャンパス:050-0804 札幌市南区芸術の森1丁目

看護学部・看護学研究科・助産学専攻科  
舞園キャンパス:050-0011 札幌市中央区北11条西13丁目

【お問い合わせ先】  
札幌市立大学 地域連携課  
e-mail:reikei@scu.ac.jp / TEL:011-592-2346

文部科学省：平成 25 年度採択：「地（知）の拠点整備事業」

## ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業

大学教育(高等教育) × 中等教育 × 生涯学習 × 地域産業力育成(社会教育)

地域のひと々と本学の学生が相互に学び合う場、ウェルネス×協奏が高まる「学び舎」を共に創りませんか？

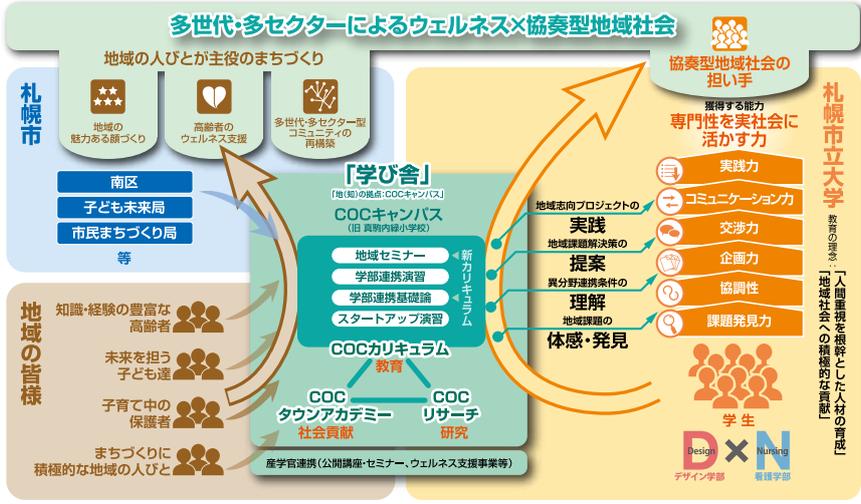
生涯にわたる「健康で「楽しく」「生き甲斐がもてる」状態

札幌市立大学 www.scu.ac.jp



札幌市立大学のこれまでの地域との関わり例

■本事業の概念図 地域の人びとと札幌市と札幌市立大学が連携して、地域を「学び舎」とした「地域志向のカリキュラム」を展開し、協奏型地域社会のウェルネス支援、地域の活性化に貢献する人材(地域の皆様、及び、本学学生が対象)を育成します。

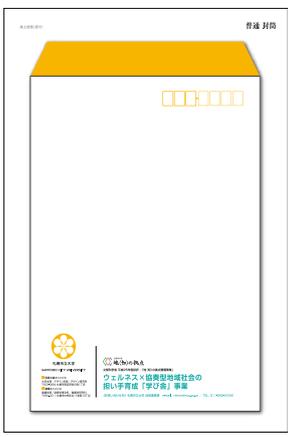
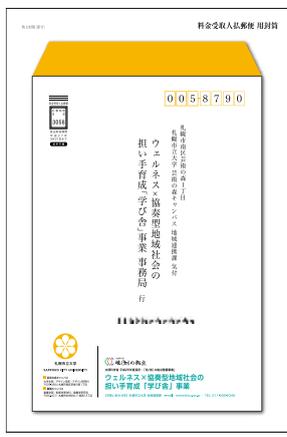


本事業が生み出す社会変革のイメージ例



■本事業の展開イメージ (スケジュール/計画)

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
真駒内COCキャンパス	耐震改修工事 南区施設で活動	試行	本格稼働		
COCカリキュラム(教育)	計画	学部連携基礎・地域セミナー試行	新カリキュラム実施		
COCリサーチ(研究)	先行調査	「COCリサーチ」共同研究実施	各研究テーマ毎に推進		
COCタウンアカデミー(社会貢献)	試行	プレ開講	「真駒内夜学校」開講 「真駒内シニア・アカデミー」開講		



## 文部科学省：平成25年度採択：「地(知)の拠点整備事業」 ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業

■本事業の概要

多世代・多セクターによるウェルネス×協奏型地域社会

地域の魅力ある街づくり  
高齢者のウェルネス支援  
多世代・多セクター型コミュニティの再構築  
協奏型地域社会の担い手

【学び舎】真駒内COCキャンパス

獲得する能力  
専門性を実社会に活かす力

実践力  
コミュニケーション力  
交渉力  
企画力  
協調性  
課題発見力

地域志向プロジェクトの実践  
地域課題解決策の提案  
異分野連携条件の理解  
地域課題の体感・発見

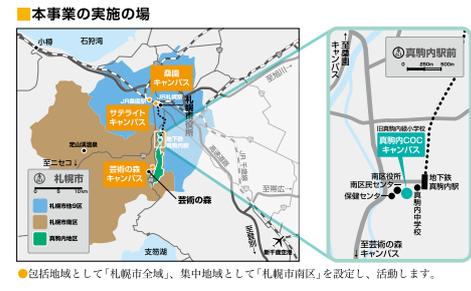
札幌市立大学  
教育の理念で「人間重視を根幹とした人材の育成」  
「地域社会への積極的な貢献」

学生  
Design X Nursing  
デザイン学部 看護学部

●地域の人びとと札幌市と札幌市立大学が連携して、地域を「学び舎」とした「地域志向のカリキュラム」を展開し、協奏型地域社会のウェルネス支援、地域の活性化に貢献する人材(地域の皆様および本学学生が対象)を育成します。

協奏型ウェルネスが高まる「学び舎」を共に創りませんか？

地域の人々と本学の学生が相互に学び合う場、



①「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」とは？  
A 自治体と連携し全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を、文部科学省が支援する事業です。平成25年度に全国22大学が採択されました。課題解決に資する優秀な人材の育成・技術が集まる「地域コミュニティ」の中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としています。

②COC=Center of Community

③ウェルネスとは？  
A ウェルネス(Wellness)とは「健康に誇り」「豊かで「楽し」「生き甲斐がある」状態です。

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科  
芸術の森キャンパス：2006-2004 札幌市南区芸術の森1丁目  
看護学部・看護学研究所：札幌市中央区南11条西13丁目  
札幌市立大学  
札幌市立大学 地域連携課  
E-mail: renke@psc.uac.jp / TEL: 011-592-2346

### Ⅲ 平成 25 年度の活動

#### 1 事業計画

本年度、本班に与えられた役割をもとに、具体的に以下の項目について活動を行うこととした。

- (1) COC 事業の挨拶パンフレット作成
- (2) COC 事業での封筒作成
- (3) COC 事業の広報 Web Site の作成
- (4) COC 事業の映像 / 静止画による記録
- (5) COC 事業の郵送での広報活動
- (6) COC 事業の平成 25 年度公開フォーラム配布資料作成
- (7) COC 事業の平成 25 年度報告書の作成
- (8) COC 事業の各種イベントチラシの作成

#### 2 主な活動

##### (1) COC 事業の挨拶パンフレット作成

本事業に採択されたことの対外的な周知、また、札幌市内（主に南区）の関係協力を仰ぐ機関に対して、挨拶的に利用することを想定したパンフレットを作成した。

##### (2) COC 事業での封筒作成

本事業の対外的な周知や、「研究企画推進チーム」が実施した南区在住の高齢者ニーズ調査実施（9000名）での利用を想定し、本COC事業専用の封筒を作成した。

##### (3) COC 事業の広報 Web Site の作成

インターネットを通じた、本事業の対外的な周知の為に、WebSiteを制作した。このサイトに関しては、業者への外注によるCMS（コンテンツマネジメントシステム）の考え方に基づくシステムの設計を行った。具体的には、9つある班と1つの事務局から構成される10の組織が、個々に独立して情報発信が可能な仕組みの構築を行った。また、本事業が地域住民とともに歩む事業であることから、学外の閲覧者が本事業に関わることの支援が第一と考え、イベントの告知を中核とするページ構成とした。

##### (4) COC 事業の映像 / 静止画による記録

本事業では、教育（カリキュラム）改革を重要な目的の一つとしていることから、学生への教育を目的とした教材の作成を想定した。そこで、映像 / 静止画による記録に関しては、対外的な本事業の広報を目的とするだけでなく、教材としての活用を想定した加工編集が可能となる撮影方法を、外部業者に



<http://coc.scu.ac.jp/>

依頼する形式とした。平成 25 年度に関しては、学部連携演習（1月14日）、COC 連絡会議（1月31日）、COC 市民講座（静止画のみ / 2月20日）、平成 25 年度公開フォーラム（3月8日）、SCU まちの学校公開講座（3月24日）の映像 / 静止画による記録を行った。

##### (5) COC 事業の郵送での広報活動

本COC事業は本年度採択されたものであり、採択されたことの報告を第一の目的に郵送での広報活動を検討した。まずはじめに、送付先に関する検討を行った。「札幌市内の福祉医療機関（122カ所）」、「デザイン系、看護系を含む全国大学等教育機関（391カ所）」、「札幌を中心とした企業（113カ所）」、「他のCOC採択校（50カ所）」の計676組織（施設）



のリストを構築し送付先の対象とすることとした。また、送付内容としては、挨拶状、事業パンフ、フォーラムチラシ(参加申込 Fax 用紙)を作成し送付した。

### (6) COC 事業の平成 25 年度公開フォーラム配布資料作成

平成 25 年度のまとめとも言える、公開フォーラムの参加者への配布を目的とした資料を作成した。

### (7) COC 事業の平成 25 年度報告書の作成

まずはじめに、報告書の記載事項の検討を行った。書式確定後、各班の班長に執筆を依頼し、報告書をまとめた。(3月8日の公開フォーラムにて、β版を参加者に配布し、3月末に正式な報告書を完成させた。)



### (8) COC 事業の各種イベントチラシの作成

平成 25 年度は、「学び舎企画推進チーム」が企画した2件の市民公開講座に関して、告知用のチラシを制作した(「地球環境時代の住まいを考える 一省エネルギー基準の改正をきっかけとして」、平成 26 年 2 月 20 日開催/「地域の人々と学生が共に学び合う“学び舎”について」、平成 26 年 3 月 24 日開催)。デザイン制作にあたっては、制作補助業務を本学デザイン学部生に依頼した。今後もこのような催事告知用媒体の制作が増えると予想されることから、制作依頼から納品、告知までの一連の手続きを整備し、次年度より運用する予定である。

## 3 評価

本班に与えられた役割は、具体的なアウトプットを求められるものであったが、事業開始の年度ということで、アウトプットの枠組みのあり方に関する検討に時間を要した。質の面では、納得のいくものにならなかったが、今後、質の追求をする準備ができたと評価する。

## IV 今後の課題

今後も本班の役割である本事業の広報活動を継続して実施していくが、本事業そのものの推進を後押しできるような広報活動のあり方を模索していきたい。

COC 市民講座

### 地球環境時代の住まいを考える。 一省エネルギー基準の改正をきっかけとして

3.11 の東日本大震災後の激変するエネルギー環境の中で、住宅の省エネルギー基準が改正されました。基準の仕様が、これまでの断熱性に加えて、暖冷房・換気・給湯・照明に関わる一次エネルギー使用量の削減へと大きくシフトしました。これからの住まいづくりや住まい方に、どのような影響が出てくるのでしょうか? 省エネルギー基準の策定を主導され、「自立型住宅」研究の第一人者である建築研究所の澤地孝男先生より、「北海道の住まいとこれからのエネルギー利用のあり方」についてわかりやすくお話しいただきます。

澤地先生のお話を受けて、福島明(北海道立総合研究機構 建築研究本部 北方建築総合研究所・副所長)と齊藤雅也(札幌市立大学デザイン学部・准教授)がそれぞれの立場、専門領域の知見をもとに、ディスカッションを行います。

#### 講師

澤地孝男氏 独立行政法人建築研究所  
環境研究グループ長



1985 年東北大学大学院修士課程修了、工学博士。1990 年以降建築研究所及び独立行政法人建築研究所にて住宅及び非住宅建築物の省エネルギー診断法及び性能評価法の開発に貢献。自立型住宅への設計ガイドライン、省エネルギー基準の改正(2009 年、2013 年)、シミュレーション対策基準の策定等に従事。

#### 日時

2月20日[木]  
13:30~15:00

#### 会場

札幌市立大学サテライトキャンパス  
札幌市中央区北4条西5丁目 アスデ45-12階

#### 参加料

無料(定員50名)

#### コメンテーター

福島明 北海道立総合研究機構  
北方建築総合研究所 副所長

#### 司会

齊藤雅也 札幌市立大学  
デザイン学部 准教授

#### 主催

札幌市立大学・北海道立総合研究機構

#### 対象者

市民のみなさま

#### お申し込み先/お問い合わせ先

札幌市立大学サテライトキャンパス  
TEL: 011-218-7500, FAX: 011-218-7507  
E-Mail: kocz@acu-h.jp  
※お名前(ご所属)、ご連絡先をお知らせ下さい。

札幌市立大学 WELNESS×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業

地域の人々と  
学生が共に  
学び合う  
“学び舎”について

SCU まちの学校  
公開講座

開催日 2014年3月24日(月)  
14:30~16:00

会場 札幌市立大学サテライトキャンパス  
(札幌市中央区北4条西5丁目アスデ45-12階)

定員 50名(どなたでもご参加いただけます)  
参加料 無料

お申し込み先/お問い合わせ先  
札幌市立大学サテライトキャンパス  
tel: 011-218-7500 fax: 011-218-7507 e-mail: kocz@acu-h.jp  
※お名前(ご所属)、ご連絡先をお知らせ下さい。

1. 観覧の受付 講師 COC 事業推進委員会・札幌市立大学学生  
2. ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業について  
3. 基礎講座 「国策と自治体によるまちづくりの役割」  
一編者として参加の希望、会場の上の1階に入学希望者へ  
4. トークショー 「地域の人々と学生が共に学び合う“学び舎”について」  
札幌市立大学学生  
5. 観覧の終了 閉館 COC 事業推進委員会・デザイン学部主催

札幌市立大学 WELNESS×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業

## 4.2 広報企画推進チーム「COC 事業催事企画・運営」 班

チームリーダー：中原宏

幹事：守村洋

メンバー：望月澄人・吉田和夫・金子晋也・長谷川聡・猪股千代子・田中広美・工藤京子・鈴木ちひろ

### I 本班の平成 25 年度の事業概要・目的

本班では、「教育改革企画推進チーム」「研究企画推進チーム」「学び舎企画推進チーム」が推進する事業を、地域・社会へ繋げる支援を目的とした班である。主に、他チームが行う催事の企画・運営を広報の観点からサポートすることを目的に活動する。

### II 本班の平成 25 年度の役割

本事業の概要や今後の活動を他大学に PR するとともに、地域住民等に広く周知する会議・シンポジウムを開催する。

### III 平成 25 年度の活動

#### 1 事業計画

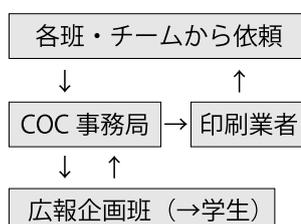
本年度、本班に与えられた役割をもとに、具体的に以下の項目について活動を行うこととした。

- (1) COC 事業の各種催事における広報チラシ作成のプロセス検討
- (2) COC 事業の平成 25 年度公開フォーラムの企画・運営
- (3) 3 月 8 日公開フォーラムにおける COC キャンパス設置垂れ幕作成
- (4) 3 月 8 日公開フォーラムにおける学部連携演習紹介パネル作成

#### 2 主な活動

##### (1) COC 事業の各種催事における広報チラシ作成のプロセス検討

教育目的としての、各種イベントチラシの作成におけるデザイン学部の学生を活用したチラシ作成プロセスを検討した。



##### (2) COC 事業の平成 25 年度公開フォーラムの企画・運営

3 月 8 日に開催された平成 25 年度 COC 公開フォーラムの企画・運営を行った。ここでは、フォーラムに加え、学部連携演習の展示を行い、市民の皆様と本学学生の交流の場を創出することをめざした。





札幌市立大学 2013年度「学部連携演習」

# 南区いきいきプロジェクト展

札幌市立大学では、デザイン学部と看護学部の3年次の学生が、相互の専門性を活かして地域の課題解決に取り組む「学部連携演習」という授業を行っています。本年度は、COCカリキュラムとして「南区いきいきプロジェクト」をテーマに、10チームが提案を行いました。

## 退職後のいきいき空間の提案 ねんりん広場

チーム1 おれも若前も哉

経験やスキルを持った定年層の男性が、講師の講師や生徒とすることで、社会貢献や多世代の交流が行われる場を提案しました。

観光スポットが多く、静かで落ち着いた南区に鉄道を通すことで、点と点をつなげ、コミュニティのつながりの強化を目指す提案をしました。

南区に「芸術の森鉄道」を通す

チーム3 芸術

## みなみらくる

高齢者の方への外出の機会を提供し、もっと南区を楽しんでもらうために、南区の各地で果物や野菜の産地を行う移動式イベントを開催する提案をしました。

チーム10  
CLS～芸術と理性のかつてぬい縫合～

## 南区きんりんピック 地域スポーツ大会による 真駒内地域活性化の提案

チーム5 D×Nico

## 死への不安を軽減する終活

終活のための講座「Never ending story」を開催し、死への不安軽減、出会いの場の創出を行うことで、残りの人生を有意義に過ごす提案をしました。

チーム7 今日私の誕生日

## 石山商店街いきいきプロジェクト ターゲット別マップ付き エコバックの提案

石山商店街をアピールするために、年齢や目的別に9つの地域入エコバックのデザインを行いました。

チーム8  
石子に汗を～涙の汗だくたくまで通す～

## みなみの畑

チーム6 サウザンローズ

南区の農作物をブランド化し、区民の方々に南区の良さについて再認識してもらうことで、地元を好きになってもらいます。

真駒内の農校を利用して、南区民を対象とした地域オリンピックを開催することで、世代間交流を促し、地域活性化を行う提案をしました。

チーム4 ひびろびろ

真駒内駅すぐ近くに広がる飯山の道歩道の利用促進のために、リーフレットなどを作成し、真駒内駅周辺から南区の活性化をはかる提案をしました。

チーム2 やまちゃんファミリー

かつての輝きを失った「真駒内セキスイハイムアイスアリーナ」の施設改善をすることで再興をめざす提案をしました。

オリンピック施設の再生  
～真駒内セキスイハイム  
アイスアリーナを南区のランドマークへ～

チーム9 チームからあげ

観光客や地元の人たちの健康増進や定山溪の魅力発見を目的に、4つのウォーキングコースを設定し、パンフレットや案内手帳などのコンテンツを作成しました。

観光客および地元の人たちの健康増進  
定山溪の魅力の発見／再発見を促す企画

### (3) 3月8日公開フォーラムにおけるCOCキャンパス設置垂れ幕作成

同フォーラムにおいて、地域住民の皆様、旧真駒内緑小学校が生まれ変わる旨の告知を行う、大型垂れ幕の制作を行った。

### (4) 3月8日公開フォーラムにおける学部連携演習紹介パネル作成

同フォーラムにおいて、学部連携演習の展示会場において、学部連携演習の概要を説明するパネルを制作した。



### 3 評価

本班に与えられた役割は、他班の活動を、催事企画的にサポートする役割であったが、事業開始の年度ということ、催事企画を各班がどういった形式で実施するのかを調査／抽出することに時間を要した。また、3月8日の公開フォーラムの準備運営を通して、フォーラム形式に関しては、ノウハウの構築をすることができたと評価する。

### IV 今後の課題

今後は、各班の活動の特色により生まれるであろう、異なる方式での催事を企画する際のサポートを通して、より良い催事のあり方を模索していきたい。

平成27年度  
緑小が生まれ変わります！

地域の人々と学生が  
共に学び合う「学び舎」も開講！

札幌市立大学

## 5.COC 特任教員

藪谷祐介

### I 特任教員の平成 25 年度の事業の概要・目的

札幌市立大学の教職員、学生、各地域関係者と協力し、事業を円滑に推進できるように連絡・調整を行う。特に、学び舎企画推進チームの企画・立案・運営にも携わり、それに関わる、教育改革企画推進チーム、広報企画推進チームとの連携を促進させる。

### II 特任教員の平成 25 年度の役割

- 1) 旧真駒内緑小学校内に設置する学び舎等で行う公開講座、セミナー、生涯学習事業の企画・立案・準備を行う。
- 2) 各種情報発信及び学内外関係者による各種会議の開催のほか、旧真駒内緑小学校内に関連する様々な団体や多世代、多セクターとのネットワーク形成を行う。
- 3) COC 事業として、札幌市立大学が行う教育の準備を行う。
- 4) 上記事業の実施に当たり必要となる場のデザインや整備を行う。

### III 平成 25 年度の活動

#### 1 事業計画

- 1) 学び舎事業の企画・立案・準備
  - ・真駒内夜学校班の事業に関わる企画・立案・準備を行う。
  - ・真駒内たまり場・しゃべり場班の事業に関わる企画・立案・準備を行う。
  - ・真駒内シニアアカデミー班に関わる企画・立案・準備を行う。
- 2) 多世代・多セクターとのネットワーク形成
  - ・地域住民とのネットワークを形成する。
  - ・札幌市担当課との連絡・調整を行う。
- 3) 教育カリキュラムの企画
  - ・異分野連携教育科目の準備を行う。
- 4) 場のデザインと整備
  - ・平成 27 年度から活用する旧真駒内緑小学校内の施設改修デザインの調整を行う。
  - ・イベント等の場のデザイン・整備を行う。
- 5) その他
  - ・先進事例の視察を行う。

・他大学からの視察を受け入れ、情報交換を行う。

#### 2 主な活動

##### 1) 学び舎事業の企画運営

- ◆真駒内夜学校班の事業に関わる企画・立案・準備
    - ・札幌市立大学学長による、大学院デザイン研究科「ソシオデザイン特論」の平成 26 年度授業公開実施に向けて、会場検討、学内調整、広報活動などの準備を行った。
    - ・平成 26 年 2 月 20 日に実施した、COC 市民講座「地球環境時代の住まいを考える」に向けて、準備・調整を行った。
    - ・平成 26 年 3 月 24 日に実施予定の、COC 市民講座「SCU まちの学校」に向けて、講座内容の企画・学内調整、広報活動などの準備を行った。
  - ◆たまり場・しゃべり場班の事業に関わる企画立案
    - ・札幌市市民まちづくり局および子ども未来局と、旧真駒内緑小学校の施設設備の改修に向けて、打ち合わせを行った。
    - ・平成 26 年 3 月 8 日に開催した公開フォーラムの第二部として、学生のパネル展示、「緑小のこれからを考えるワークショップ 春を咲かせよう」の企画・準備・運営を行った。
    - ・地域防災事業のキックオフミーティングに参加し、企画・運営についての準備を行った。
  - ◆シニアアカデミー班に関わる企画・立案・準備
    - ・平成 27 年度から開講予定の「シニアアカデミー」の企画・準備を行った。
    - ・講師の人材発掘に向けての準備を行った。
  - ◆名称の変更
    - ・地域の人々が親しみを持てる事業とするために、各事業の名称を学内で公募し、決定した。
- ##### 2) 多世代・多セクターとのネットワーク形成
- ・札幌市長、札幌市南区の各連合町内会会長の参加を得て実施した「第 1 回 COC 連絡会議」に参加し、今後の連携のための準備を行った。
  - ・真駒内地区にあるコミュニティカフェの視察を行い、また平成 26 年 3 月 16 日に行われたイベントに参加することで、今後の連携のための準備を

行った。

- ・平成26年3月8日に開催した公開フォーラムにて、ワークショップを通して地域の人々と意見交換をし、今後の連携のための準備を行った。

### 3) 教育カリキュラムの企画

- ・平成26年度に実施する異分野連携教育科目「スタートアップ演習」にご協力頂く南区の10の連合町内会に、その内容の説明とご理解を得るために、各地区のまちづくりセンターにて、まちづくりセンター長、連合町内会会長、副会長等を交え打ち合わせをし、準備・調整を行った。

### 4) 場のデザインと整備

- ・平成27年度から活用する真駒内緑小学校の、平成26年度の耐震改修工事に向けて、大学の要望をまとめ、デザインの企画・調整を行った。
- ・平成26年3月8日に実施した公開フォーラムの場のデザインの企画・準備・実施を行った。

### 5) その他

- ・以下の先進事例の視察を行った。  
「ユニバーサルカフェ MINNA」(札幌市南区)、「廃校・旧校舎アートフォーラム～舞台制作と廃校～(あけぼのアート & コミュニティセンター)」(札幌市中央区)、「シンポジウム 病院のアートを育てるために」(茨城県つくば市)、「取手アートプロジェクト」(茨城県取手市)、「アーツ千代田 3331」(東京都千代田区)、「芝の家」(東京都港区)、「北本市観光協会(予定)」(埼玉県北本市)、「立川市子ども未来センター(予定)」(東京都立川市)、「廃校フォーラム2014(予定)」(東京都千代田区)

- ・以下の大学から視察を受け入れ、情報交換を行った。

平成26年2月10日 横浜国立大学(1名)  
平成26年2月21日 宮崎大学(4名)  
平成26年3月18日 富山県立大学(3名)

### 3 評価

平成25年度は、すべてのチームにおいて事業計画に挙げた内容を達成したと言えるが、その中で、特任教員として事業を円滑に推進できるように連絡・調整を十分に行うことができた。特に、3月8日に実施した公開フォーラムは、「真駒内たまり場・しゃべり場班」と「COC事業催事企画・運営班」が企画・運営に関わるイベントであったが、それぞれをうまく連絡・調整することができ、イベントも大盛況に終えることができた。また、積極的に足を運び、地域との関わりを持つことで、地域ネットワークの形成を進めることができ、今後の活動の基盤づくりができたと言える。

### IV 今後の課題

平成25年度に「学び舎企画推進チーム」の各班で企画した事業を実験的に運営し、平成27年度に向けて仕組みづくりを行うと同時に、地域の人々とのネットワークを形成していく。また、「教育改革企画推進チーム」と「学び舎企画推進チーム」の連携を促進させることで、教育と社会貢献との関係性を築いていく。さらに、先進事例の視察や、他大学との情報交換を行うことで、多くの示唆を得ながら進めていく。



文部科学省：平成25年度採択：「地(知)の拠点整備事業」  
ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業

---

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科  
芸術の森キャンパス：005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目  
看護学部・看護学研究科・助産学専攻科  
桑園キャンパス：060-0011 札幌市中央区北11条西13丁目

---

【お問い合わせ先】  
札幌市立大学 COC事務局（地域連携課内）  
e-mail: jim-coc@scu.ac.jp  
TEL: 011-592-5391  
FAX: 011-592-5389

平成 25 年～ 29 年度 文部科学省  
「地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)」  
ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業

#### **平成 25 年度 成果報告書**

平成 26 年3月28日

編集・発行 広報企画推進チーム 広報企画・制作・運営班、COC 事務局

<http://cocc.scu.ac.jp/>

\*ウェルネス (Wellness) とは、  
生涯にわたり、「健康で」「楽しく」「生き甲斐がもてる」状態